

一話一言補遺卷七

三座明鏡上

三芝居通言葉

木を入るとは 柏子木をうつ事
 きたたとは 仕舞た事
 きいたとは 見物請よき事
 わつばめとは 何事も善いといふ事
 荒しやばとは 始て役者に成し人の事
 すかまたとは 間違ひの事
 たべつかとは けいはくの事
 時代とは 古風のかたくなるしき事
 性根が有とは 氣がある事
 首とは 縁切れの事
 未屋落るとは 仲間計分る事
 いたやくとは 物事しくじりし事
 才鳥子とは 素人の子供の事
 穴とは 土間棧敷の明きの事
 でんぼうとは 一名あぶ 唯見物する人の事

九とは 土間棧敷を借きる事
 どんちきとは 役に立ぬ者の事
 さしかねとは 我は隠て居て人を遣ふ事
 掌握とは 一名内 ざろぼうの事
 はねたとは 一名打出 馬鹿の事
 るへんとは 名ぢ まぬけの事
 櫻丸とは 一名ち 身錢を遣ふ事
 鞘當とは しめろとは 色事の場にて不和の事
 しめろとは ぶちのめす事
 天齋とは むじんの事
 たんれうとは 催促人の事
 猿とは 女郎買のたい、持俗におぶさる云事
 つゝ込とは 人の喰物をかする事
 忍ばせるとは くすねる事
 せうがとは しわい人の事
 右の外にも 矢所のん太郎の類敷多有り又一座限りの
 通言夥敷あれとも三芝居通用せざる故に除く
 頭取座
 是は樂屋の奥の三階の上り口に有り此所に晝夜座し
 て舞臺の世話三階二階迄取締衣装道具別して脇差を

改め惣て役者は病氣を押して勤むるの口上又は淨瑠
 璃の口上替り役受引幕の長短紅たしる居風呂等の
 事までも芝居一切頭取のかゝはらぬ事なし
 急用札

見物の内宿元より急用の時樂屋わ來り頭取に頼ば頭
 取の差圖にて幕の内なれば東西へ何町何丁目何屋
 離様急用と呼亦狂言中なれば奥の柱へ如此紙へ書張

何町何屋誰様
 木戸迄急用

火入

明六ツ時より相始
 惣座中罷出相動第
 二番目迄不殘仕奉
 入御覽に候

此二枚の札向て破
 風の左に壹枚歟又
 二枚張ある事も有

御老人様方御女中
 機方跡より静に御
 廻可被成候

此札は棧敷の手摺に張置なり

病口

たくの口の事なり近比迄外座は此蔭なりしが今は大
 盡柱の蔭にてする

引幕

中村座は白紺柿の三布替り市村座は紺柿黄の三布替
 り河原崎も同じ

揚幕

西の棧敷の下のはづれに座元の紋の付きたる幕おく
 向ふ共云ふなり狂言の趣向に寄れば東にも出来る木
 挽町なれば南に出来るなり

花道

橋懸りとも云ふ先役者は出端が要ゆへ立派ならで悪
 敷見ゆる故花道をば飾りて出るの名なり昔はぬめり
 歌とて女形立役とも花道にて少し宛の振事有りて出
 しどかやされば助六もぬめりの替り江戸節にて出し
 物なり

日覆

舞臺の上三階の簀子の際の際に簾を紙にて張黒く染めて
 懸て有此中より鳥或は魂の類を遣ふ一面櫻又は紅葉
 の枝をつりて置くなり

當時はなし是は切落しの見物を前へすくめて出す時
 幕の内にて段々つまる太鼓に續いてしやぎりを打を

す

客座

女形の三枚目を客座といふ是は立役の二枚目三枚目と位を争ふ事有り互に出世の事甲乙付難く故に何となく一人を客分にして女形三枚目の所々置き亦二枚目おとなしく客座に有りて三枚目を二枚目へ置くも有り又表計は三枚目を二枚目置きても樂屋にては矢張り二枚目三枚目と分るゝ事有り互に位を争うて双ふ客座不承知なれば別に庵にして置く



如此書て役割番附の際へ寄く又役者附より座りして番はわざと抱へりし故なり尤座には出はず

女形四枚の所々置きは立役四枚目以下甲乙を争ふ時橋下か又は女形四枚目の前へ置是れ甲乙なからんか爲めなり此番附立役より間中までは紋を黒くして中通りは紋を白くする事あり尤子役色子迄残らす出す也

立師

是は中通りの立の功者成人を云大立の時は工夫して

惣稽古に立て見すると立を勤る人一覽して直に稽古をする其余の立者同士は自己の工夫にて大刀打格外に面白きなり亦たかしみを加へて遣ふを世話の立といひ立にも江戸風あれど今は上方の風のみ多し残念の事なりといふ

若い衆

是をわ下とも云おしたとは三階は立役より中通の部屋に是を亦稻荷町とも云稲荷町とは昔樂屋に人道の稻荷の前に名をす又向頼共樂屋の中通り三階の通り道にて片頼にわはやし其向頼に居る故向頼といふ亦林町とも稻荷町とも云家並の如く兩頼に居並ぶ故町と云ふなり正本に仕出しと書きしは皆若衆の役なり席開を第一の狂言とする惣て藏衣装にて勤む役者付きには名前をしるすなり

色子

若衆方若女形方の役に成素人らには先づ一兩年京都へ登り其後江戸へ出る是れを新へらといふ坐敷を重として勤むるなり

旅芝居

是は三芝居にて抱へられし役者の旅を勤る事は法度の第一にして常に芝居を離るゝ事は丁より他へ行ま

じき約束にてかゝゆる事なり

下り役者

是は上方にて己か持前よりは二段程位を上て出し役物をも能役を付る事なり

同乗込

是れは茶や／＼間毎に挑灯を出し芝居の木戸にも出す迎ひの大勢下り役者の裾を差上て仕切場より内にかき込すく花道へ頭取其外出て舞臺行口上有りて三階へ行一座の衆中ね引合せ夫れより表へ出で茶や廻り進二丁町を廻る木挽町なれば木挽町計尤三芝居とも役者乗込の當日は木戸へ札を出す事なり左の如し

何の誰今日
當着仕候

後見

是は立者の其後ろに上下を着て狂言中舞臺へ出萬事の用を辯す夜分はさし出し逆蠟燭を燈して出すこれは弟子の中にて勤むるなり

振付師

所作事は振付師拵へて子役に教ふる立役若女形などは師匠の振なごを其儘にうつす亦工夫の振ありあて振も有何れ振付師と相談の上でなければならぬ事なり役者にて振付を兼ねて居る人は中村仲藏二代目仲藏初め大谷鬼治中山小十郎市川鱒藏初め吾妻文藏なり此の外にも役者の内に振付委敷人もあれども振付師を兼ねる人はなし

狂言方

是は作者なり亦つくりしともいふ狂言の正本書抜を拵らへて役者に渡し稽古の場所へ出るなり芝居興行の中は毎日未明より出勤して番立より拍子木を打て幕を明る亦拍木幕は拍子木のあんばい第一にして功者でなければ打ぬ物なり初日には舞臺一切の差圖をして付立にくらべて大道具小道具のしらべをなし正本を持って始終舞臺に控へ居てさし金を遣ひはやしきつけ臺詞の節々を補ふなり

正本

是を大帳とも云ふ臺詞は元より大道具小道具衣装物好鳴物迄不殘記せし本なり此の内に一段書してト書たる所有りたごへば何々と臺詞を書付て

ト始終よろしくにて犬の頭動くと聞蔵開耳を立て
聞蔵ム、スリヤ何といふ我大願の聞届しとや○日
頃の大望立せしかアラ〜悦ばしやナア

紙表の本正

成の春狂言 陽向會我二番目 山崎與五郎	留三郎藏 喜代太郎 彦四郎	八松助藏 音四郎 四郎五郎
袖競 八幡村南與平 二番目	艶仲町 榮三郎	葉七郎 若衆大勢
駒形茶屋の場		歌之助 葉之助 若衆大勢

文化十一年戊正月大吉日

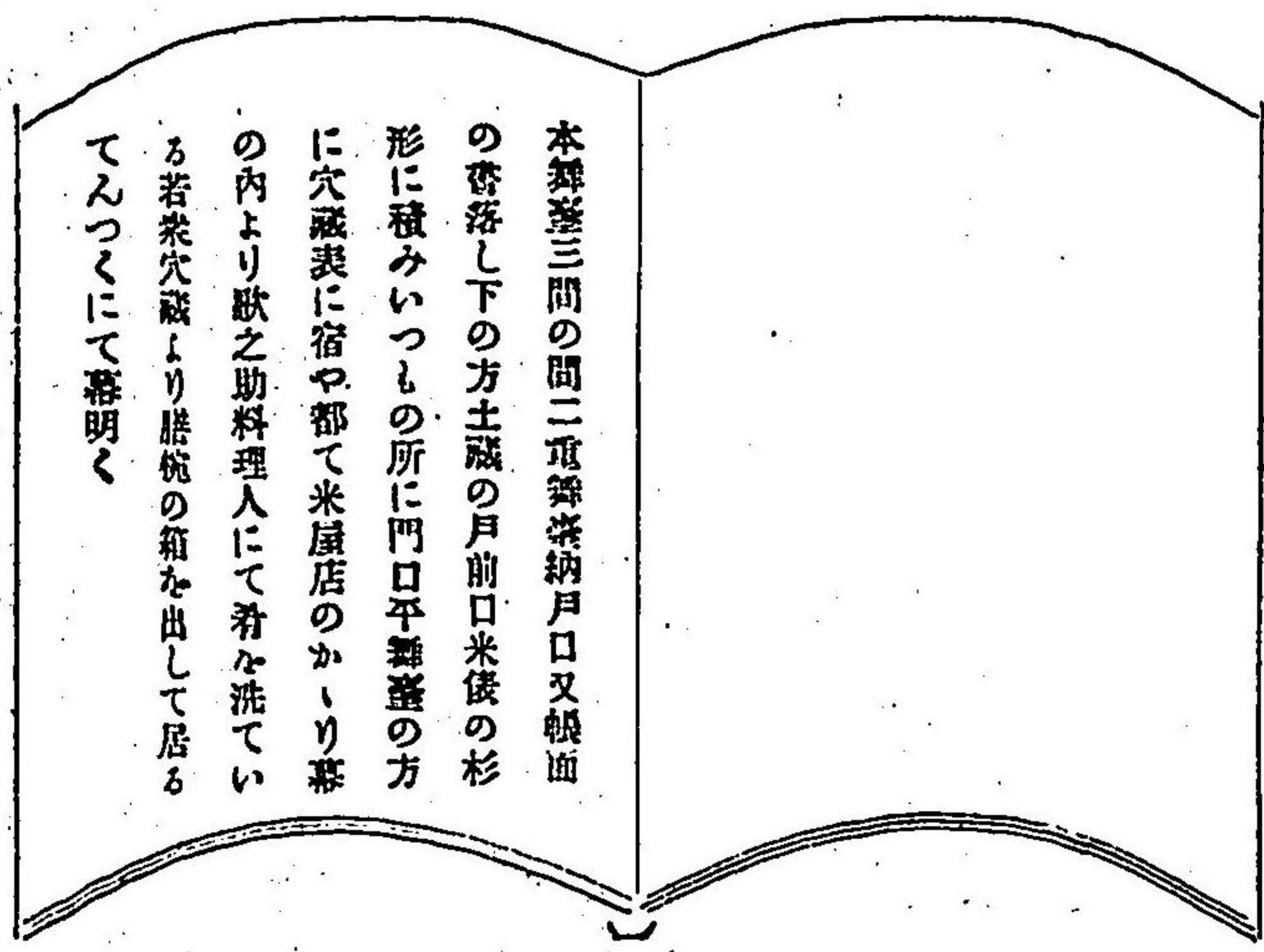
紙敷二十三葉

千秋萬歳

大々叶

作者 勝俊 編

同内の圖



先如是わけなり○印は裏詞の内思ひ入有所に書くな

り但しト書には思ひ入ムリ升はござりまする也 又ト書内にはきつとなる見詞は見物に見ゆる様ばた〜
 是は足音のつけ こなしは腹の立つか又は惚れた地へ取
 おさの事なり 是は後髪を捨せりふふは間に合にせり立廻
 なりれんり引かれは後髪を捨せりふふは間に合にせり立廻
 是はほごよく仕出しは盛りのぞめきの類なり又見事切是は首
 立廻を事なり仕出しは盛りのぞめきの類なり又見事切是は首
 を切りたばつと出見は田舎の山 此類様々多し略す

本讀

是は世界定が濟と作り上げたる正本と大立者に計内
 讀をして其後清書して夫々に讀聞せる是を乃ち本讀
 といふ扱てみな〜得心の上稽古に懸るもし狂言納
 まらぬ時は何遍にても一夜の内につゞくるなり江戸
 の顔見世狂言は上方の二の替りと同し事にて風出に
 叶ふ様賑やかな狂言でなければならぬなり先出世役
 者改名新下り子役の立物には相應の役廻りなくては
 ならず一體に上方の役者は一座にて三十人には過ぎ
 ず江戸の一座の惣役者は五十人余有り是に役不足な
 きやうに狂言をつづるなれば手取物なり其所に近頃
 三十人に足らぬ狂言をはめて取組事多き故間中より
 以下出世の運き事を知るべし夫はいかなれば役らし
 き役をさとの故なり衣装を新に着るもむたらしき事

共多しとなり

付立

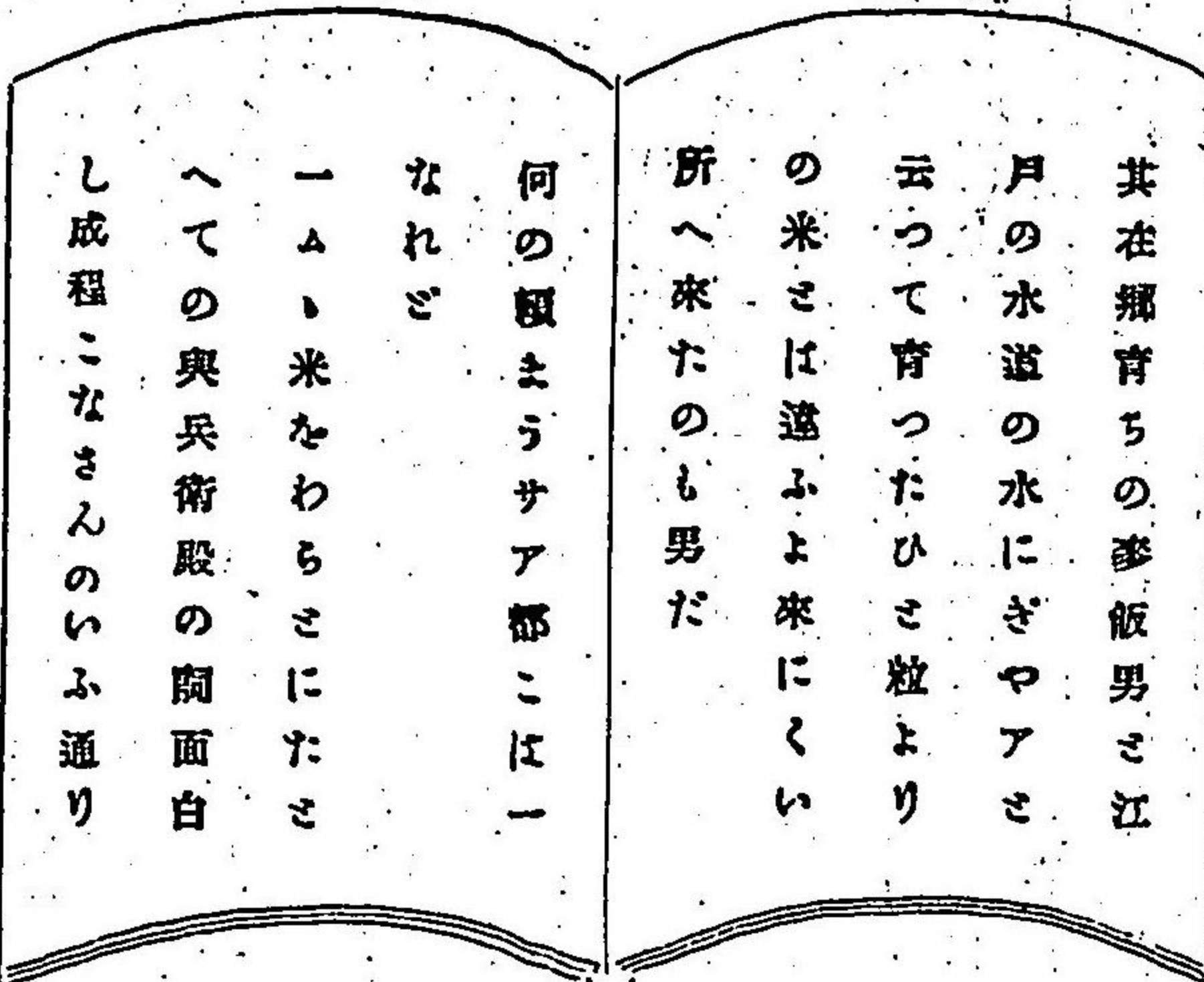
是に頭付共いふ亦しらべともいふ是は惣ざらひの前

陽向會我二番目	八幡場書扱
中車	

大々叶

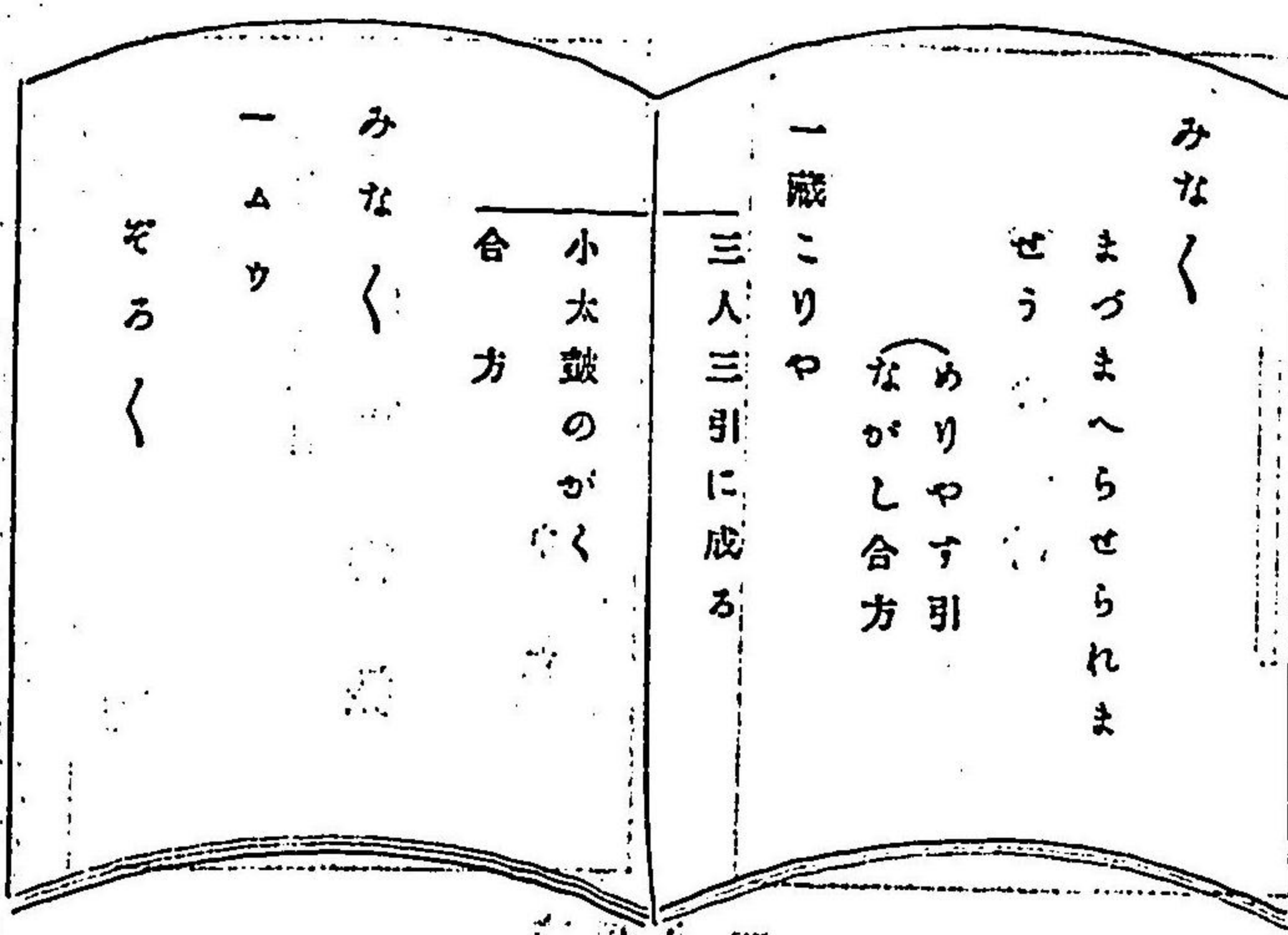
一ノ扱番

日積古の時狂言方にて入用の物を書き上ぐる依て名
ぞす衣装付藏衣装小道具一色なり物の外座付初日一



二ノ抜書

色の上らべもなす此付立帳にて合せて初日を出す是
は金井三笑の工夫よりなり



三ノ抜書

是は銘々役分のせりふを狂言方正本内のより書抜て

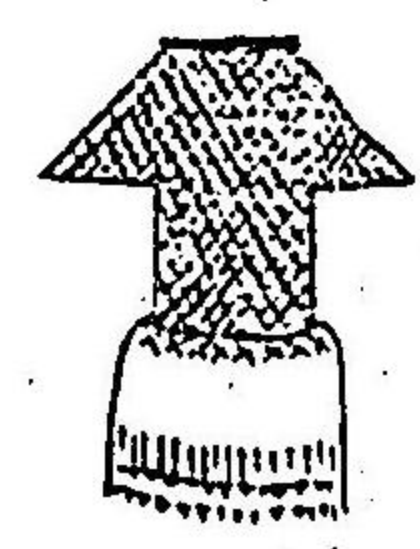
送る故名とす但しきつかけのせりふは書す尤上書に
立者のは俳名を認裏に大々叶と書く間中は名を記し
裏に大々叶と書き中通りには名前計りを記す事なり
外座付には如此きつかけと書抜にて渡す
外座中鳴物一式きつかけと認し帳なり惣稽古には此
帳をひかへ出て色々差引ありきつかけとは「後刻御
意得ませふ互になる二度目よび太鼓諷になる類なり
衣装小道具
是れは筆紙に盡し難く故に世間に用ゆるをくたい上
下羽織の類は書す全く芝居に限る物を圖にて印す但
し世話狂言に遣ふ衣類にやつしと云綿入の布子をど
てらと云亦小道具も世の通用もの多ければこれを不
書



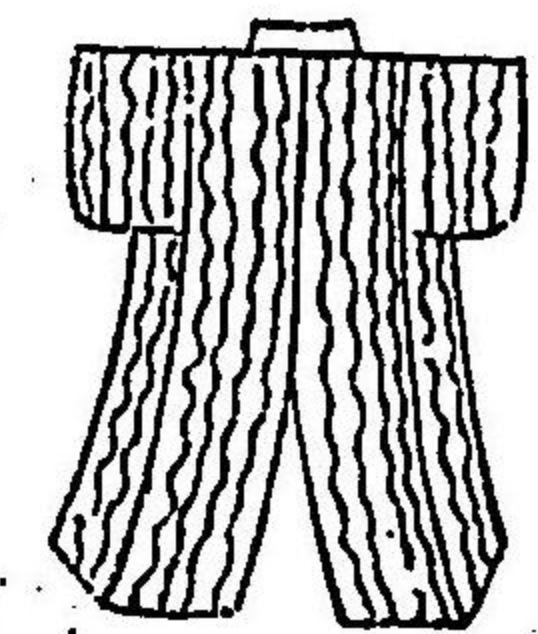
衣装の類

うりかはけしくより
是は化身もの辨天の童子の類
なり錦又は摺込なりけしくよ
り不残もみなり

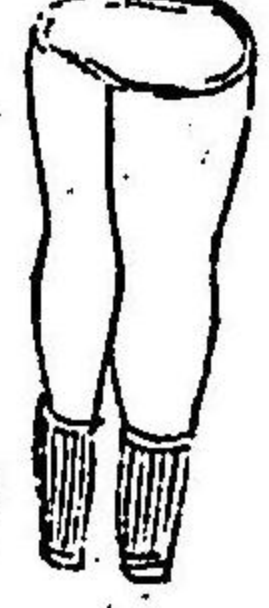
網小手



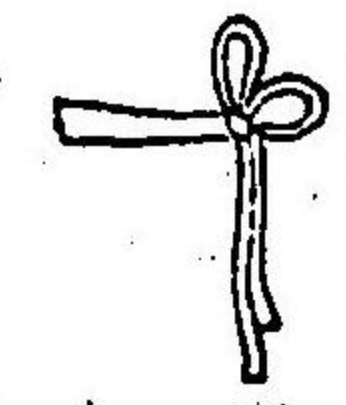
四てん



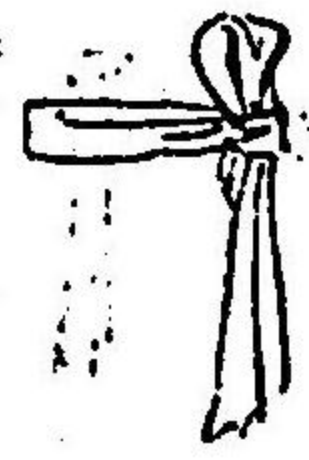
右小の
手巴下



かつら鉢巻



巻鉢の緒由



景清などの着込是は市川
流の物なり
下もみにて拵らへ上にあ
みにて襦袢を拵かけるな
り
地白ねりにてたてわく角
つなぎなど有是は景清其
外早立大あらわの時着る
又瑠璃所作の立四人語
には片手替り又は摺込色
々有

下もみの股引なり

筋金付のすね宛添あるなり
錦にて拵らゆるひらがな延壽樂
種の御供なごなり
又白の糸にてかよりをして有

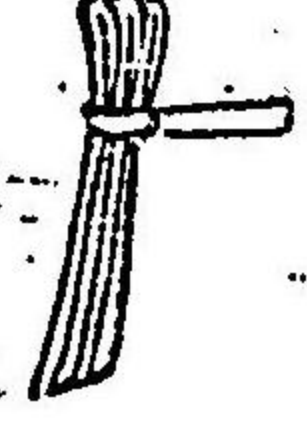
是は紫縮緬にて助六に限る市川
流に云

たまるさ



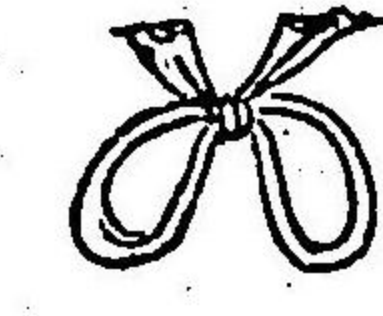
上下股立を取あら事師ひざかしらの下へ是を結ぶなり

病鉢巻



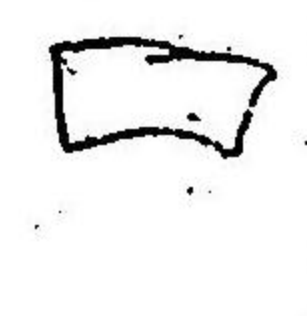
是れも紫なれども右にしめるひらがな平次松王などの類に用ゆ

ねはねは



だんだら筋の張金入にて大わらはの節用ゆる櫛なり當時は白赤ないませの櫛もあり

六部頭巾



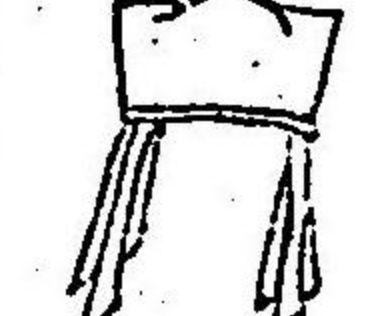
鼠木綿にて拵へる市川流といふ

僧頭巾



是は道成寺の僧なごが加ふるなり紐とへりとはもみに拵る

同秀鶴流



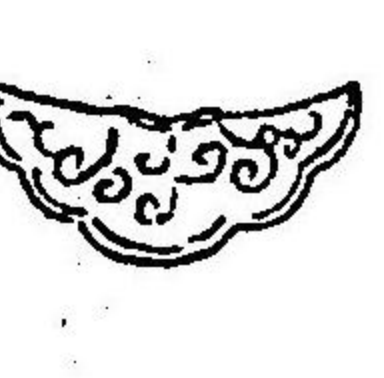
秀鶴流のは六部頭巾は雪ぼうしと云

打鐵鉢巻



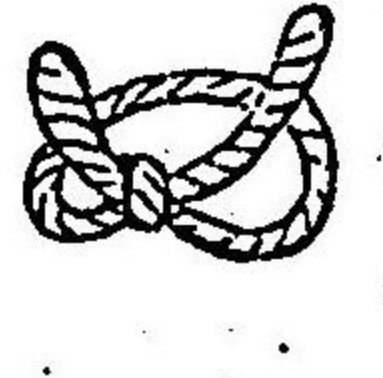
陣羽織などの時しめる白絹又は淺黄にても何れも鉢巻を打なり

ビコト



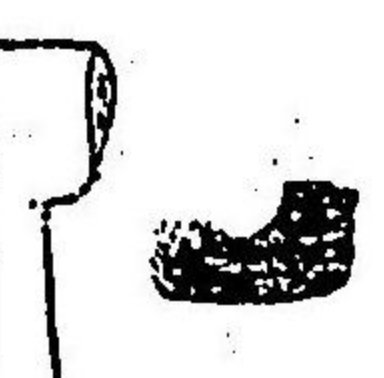
唐人衣装なり暫くの交丈か三詰などには着る金入錦にて拵る也俗によだれかけと云ふ

なまいせ



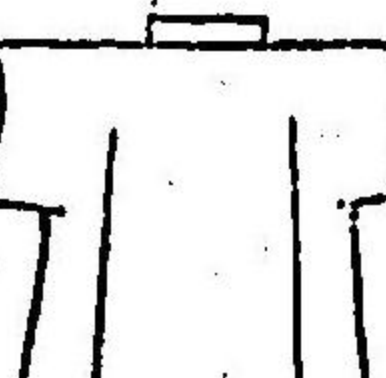
朝比奈か又は辨慶其外あら事師大あらわのときしめるなり

手沓



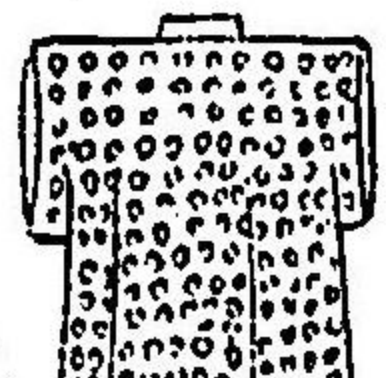
紺の足袋の如く熊の毛にて大將のばく物也是をはかざる時は武者わらじとて三四枚重ねたる草鞋をはくなり

半切



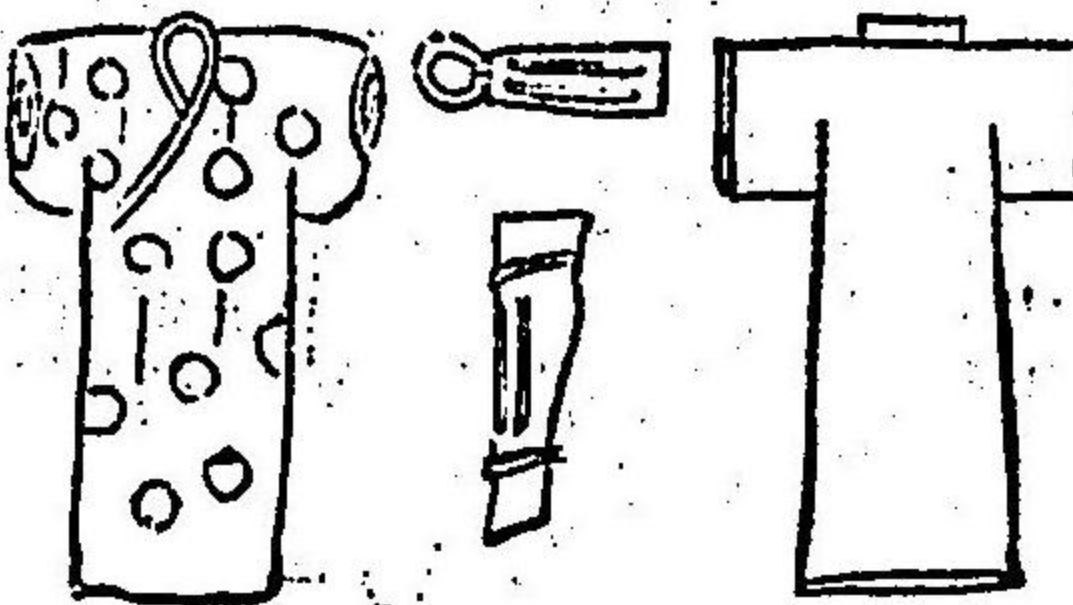
錦又は摺込何れ結構にして有是はあら事師の結合大わらわの時に是を着る

胴丸



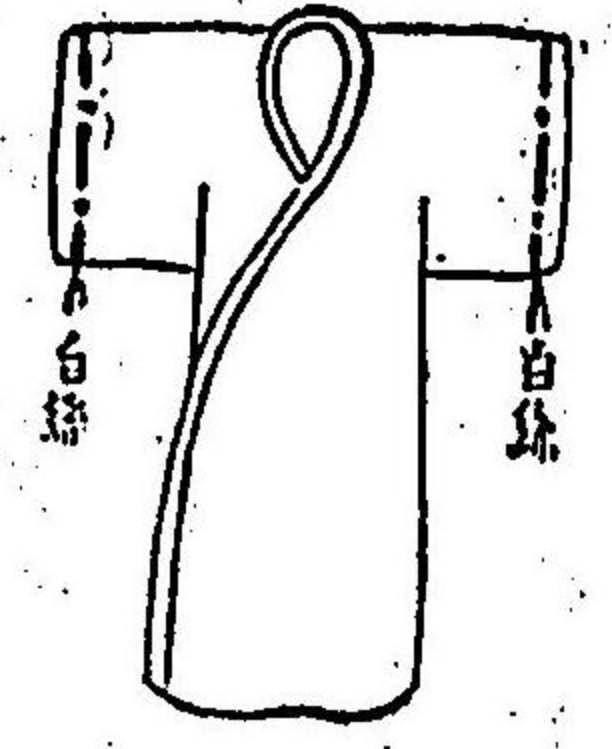
網襦袢なり小羊すねば是に添あるなり陣立の時用ゆ地白ねり裏もみ表へ大なる鉢巻を打てあるなり

軍兵小手懸當壺織



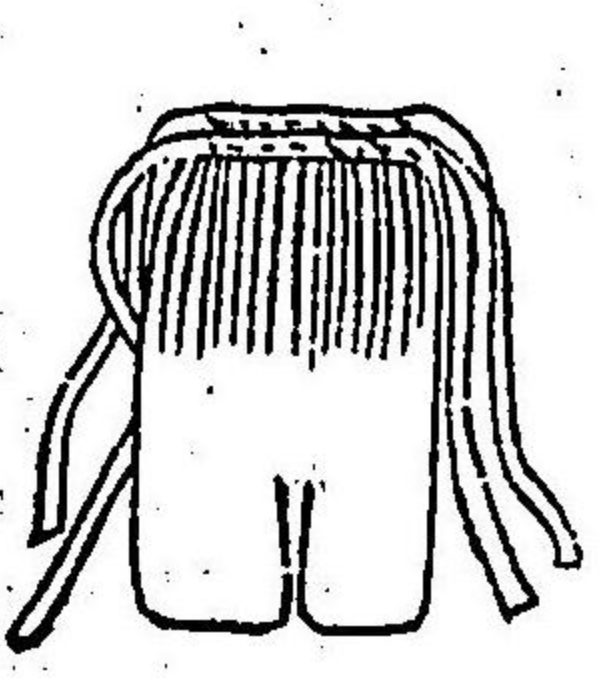
地木綿にて唐草の模様裏面木綿若衆の藏衣装なり大詰に取手などに用ゆ別懸て居る故に自由なり地ものにて張錦の摺込にて筋かねは眞鍮なり又は紙打の類もあるなり模様は八ツ藤又は唐草摺込何れ結構のものなり是は義家義経などの大將の着用なり

長絹



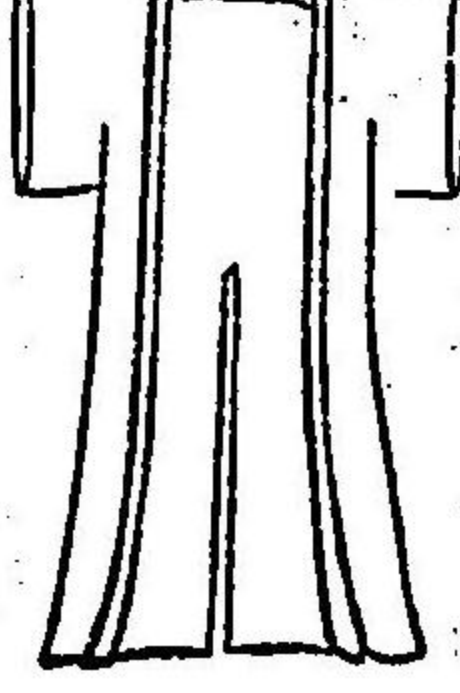
能装束にある物なり地赤又萌黄又は桃色何れも裏はもみなり能にては水干芝居にては水干とも長絹ともいふ羽衣雲林院の能懸り芝居にては忠臣藏忠意又は頼家さね都のかより絹にまぎれて遣ふ地萌黄うすもの紗すししの類にて模様は花ものにてさま〜あり

大口



よるひ下陣羽折軍立に用る能装束にも有先大抵白にて用ゆるなり

陣羽折



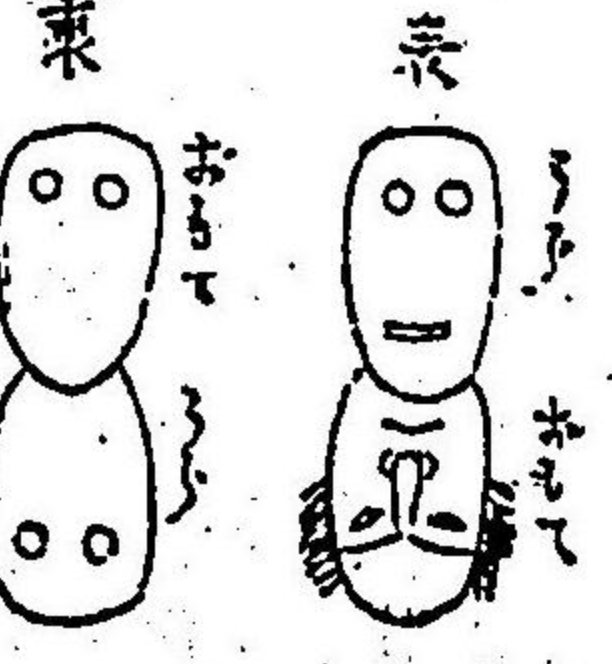
錦の摺込にて又は猩々緋まがひさま〜有り

坊主



若衆は淺黄木綿なり

切下ケの面



口にくわゆるかんてらごもさしたしごも云

東



なげ出し首



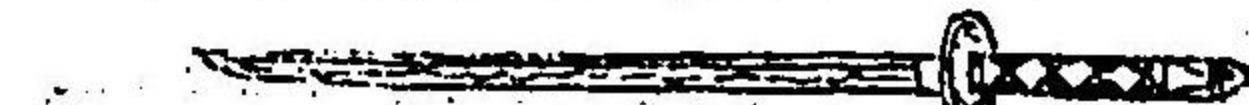
張こにて拵へごふんぬりさしき毛植ものなり

飛出し目



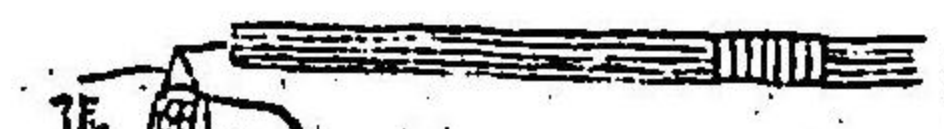
目玉は團子の様 拍子木に拵へ紙にて張其外は張金にて口にくわゆる也 先きを丸くする

なたかいやし



真餘の鏝を一枚にして音の第一とする

革の明用だ引るを

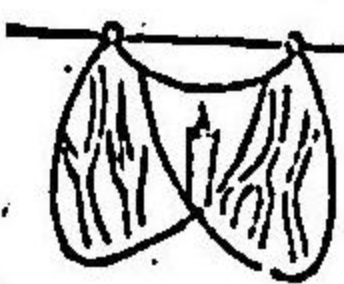


張金にて拵ゆるなり

狐火

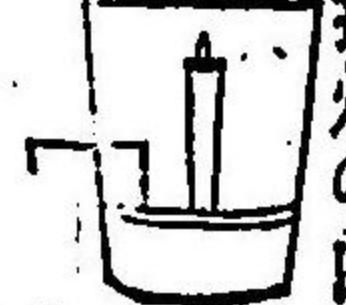
金網の内樟腦を入る火を点すなり

人の魂



此赤にて火煙すかし張内紙にて張ひも如此穴へひも是を通し引く

忍提灯の内



赤金銀ながし内を白き紙にて張浪の模様なり

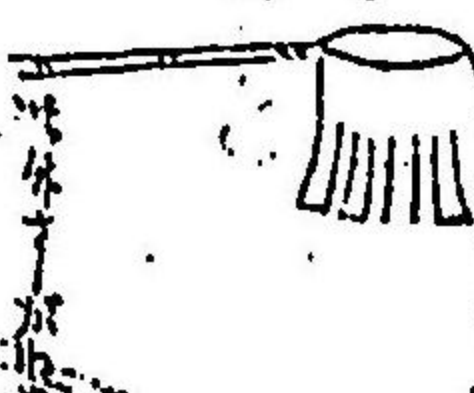


此所折て疊む

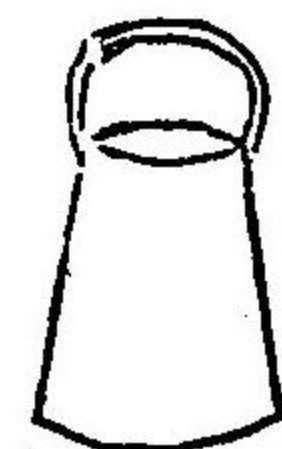
此所金物にて曲物をふせ置時はあをむく様に上下廻る仕懸けなり

立者ならでは不用尤白木なり後ろに後見面々持て居る

ゑん火鬼火あやしき火

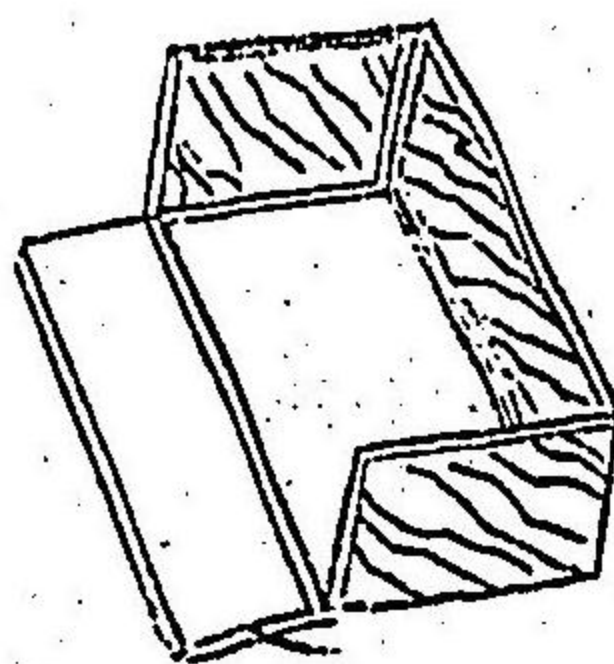


木綿の切をせうちうにひたし火をひたすなり但鐵砲工の名酒でなれば遣はれ



曲物にて拵らへ黒き紙にて張

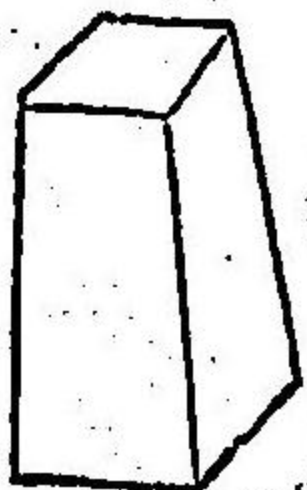
幽霊の火鉢より出る



かくの如く開くなり

世間に有と事替り幽霊の出る火鉢淺間の狂言の節是れを用る

山だい



木にて拵らへ紙にて張り白銀にてぬる間中より以下の腰懸けなり

胴切



此所赤木綿にて拵るは張子なり



死骸の替りに投げ出す也

襦籠細工紙にて張

ふきがわ

尾上松助早替りの圖



三方より合口此かつらに眉を付て有

逸成の七變化に遣ふ又は名虎の再來

此所かつらを隠して有り



此圖する所の姿は掘出し姿なり此の如くにかつらを隠してある頭を振きつと成どかつらの方へはね返り前にて合引の糸をしつくりとささまる是よりおはくろを付け装束をするなり扱て合引とは糸紐にて拵らへて有仕懸けなり糸を引ぬくといふなり

黒幕二重にしてある



圖する所は白布の合引をぬくを下黒の縫くるみに骸骨を縫付けて有り是れも亦合引をぬくと骨ばらりと前へ落るからだは直に幕にくるまり切穴へ入るなり

小道具

たとへば忠臣藏なれば烏帽子兜櫃かふと煙草盆蒔繪の文箱花生作り花白木三方短刀乗物蛇の目傘敷笠篋竹の子笠山岡頭巾鐵砲四ツ手駕提灯鳥の財布戸板盃

銚子硯蓋先荒まし是等の類又雪を降する稻光りのろし下家の煙などに懸る花の枝た安がはやめの梅其外さしがね物はみな小道具の類なり

さしがね

是は鶏ちん犬鼠蛇蛙狐と鬼火怨火の類みなさしがね逆長き竹に付て遣ふ尤も初日には狂言方見計ひて是を遣ふ其後は小道具方是れを遣ふ日覆の中に遣ふは雁鳥の類人魂を遣ふ相引とて繩にて若衆引亦坐に寄りて鶏蛙はお囃にて遣ふ亦雀は二三羽位生たのを放す事有

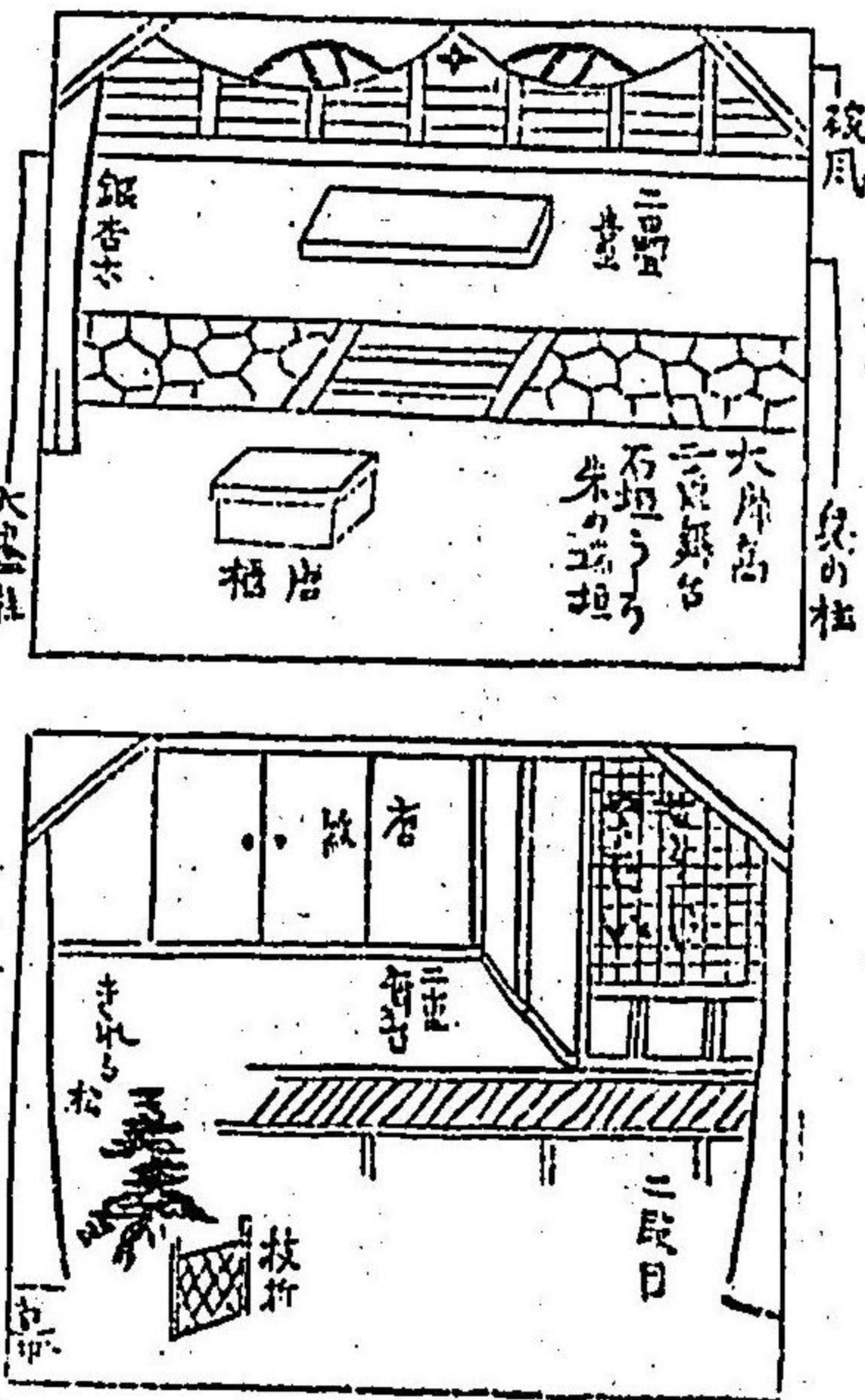
藏衣装

藏と計も云ふなり是れは芝居より拵へて渡す衣装にて毎日芝居の藏に納め置き又明朝出し渡すなり若衆の衣装は是れなり亦立形より女形を勤女形より立役をなす時は此藏衣装にて芝居より渡す織母の衣装白張素袍束帯陣羽織の類又は物狂ひの小袖などはみな藏より出すなり

大道具

本舞臺三間の間道具を併る三間の間とは柱と柱の間を云今は舞臺一面にてする先飾付門口枝折門紫垣藪

疊たゞの烏居瑞垣堂宮金襴障子家體明建の戸棚日覆より下る紅葉櫻の類枝の切る松切り破扉飛石手水鉢盗人の當る焚火都て見付の物皆大道具なり狂言あらたに出す度毎に一寸幕切に畫圖を認め狂言方より渡す是を見て大道具拵ゆるなり



此の外舞臺より一段高き臺を二重舞臺と云ふ亦高二重舞臺有る處作事の時板の平か成るを拵へ別に舞臺におし亦廻りとはぶん廻しにて替る道具せり上げせり込も有り又切穴とて幽霊或は化變物盗人などの出る所有り委敷は後篇に記すと有

高場

是れは向ふ棧敷の上に一段高き所に金主手代等の居るところを高場といふなり

大盡柱

是れは舞臺の中の柱なりまたシテ柱ともいふなり

○假名手本忠臣藏 十一幕

○九山科の雪轉し

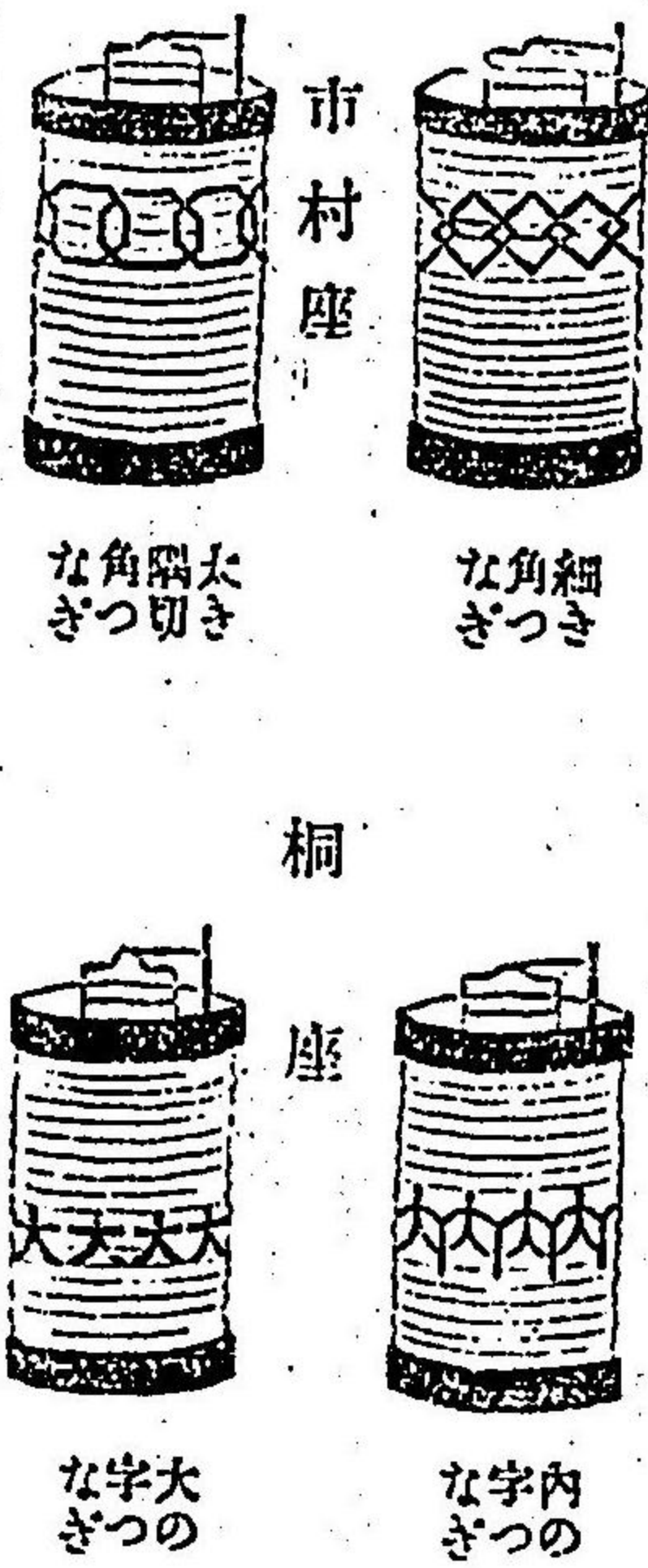
是れは席段なれども大席何々九段目なれば斯の通り書きて大盡柱と奥のはしらに懸け置く

挑灯の圖

三芝居送りに用ゆる箱挑灯の圖役者銘々寄始の節はおのゝ挑灯は名紋所をしるすなり

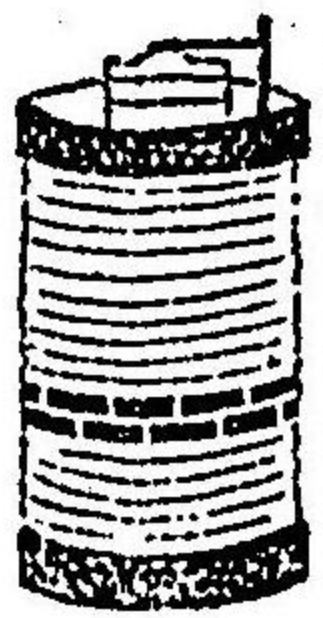
中村座

都座

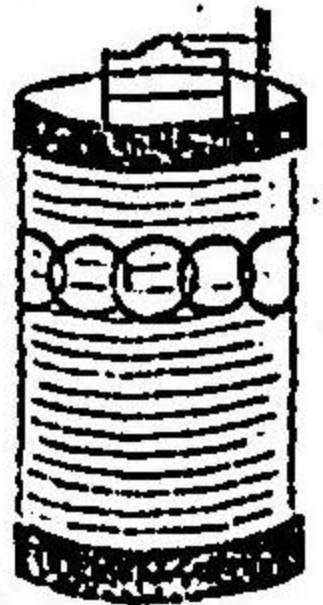


河原崎座

森田座



引籠



輪違

正月

仕切翁共云正月元日三座共狂言の仕初をなす常は番立とて三番叟は若衆勤る尤翁は太夫元に限れども若し幼少なれば縁類の人か又は頭取是に代りて勤む千歳三番叟は弟子筋の人か振付師か一座の内にて拍子のききたる人此の役を勤む市村座には附千歳有るなり扱式三番叟終て太夫元並若太夫太盡柱の前へ毛氈を敷きて夫れならひて地謡ひになれりと座頭出て真中に座す以て女形の立役次に敵形と次第に座に付く尤も中頭迄の立役中通の女形は何も上下を着す扱各々座定りて座頭狂言の口上を述べて大名題小名題役割に讀せ跡にて扱仕初と仕り升て小役の花踊を御覽に入升すと口上の内に長唄三絃お嘶みなく上下にて出ると子役も出小舞二番所作三番程勤め是は何々とは定め難し先師匠の勤たる所作は勿論萬歳奉駒の様なる目出度物を出す亦あたりへみかんをま

く事も有り

一初名題看板右同日座頭題の口上濟と表に名題看板を上る同時春狂言役割番附出る併商賣にはせず年玉物に芝居懸りのもの惣茶屋の遣ひ物に用ゆるなり

一年禮は惣役者仕始終り次第に茶やぐを年禮に歩行亦芝居の懸りの者も廻り其の上座頭中二階の衆に計は禮に行

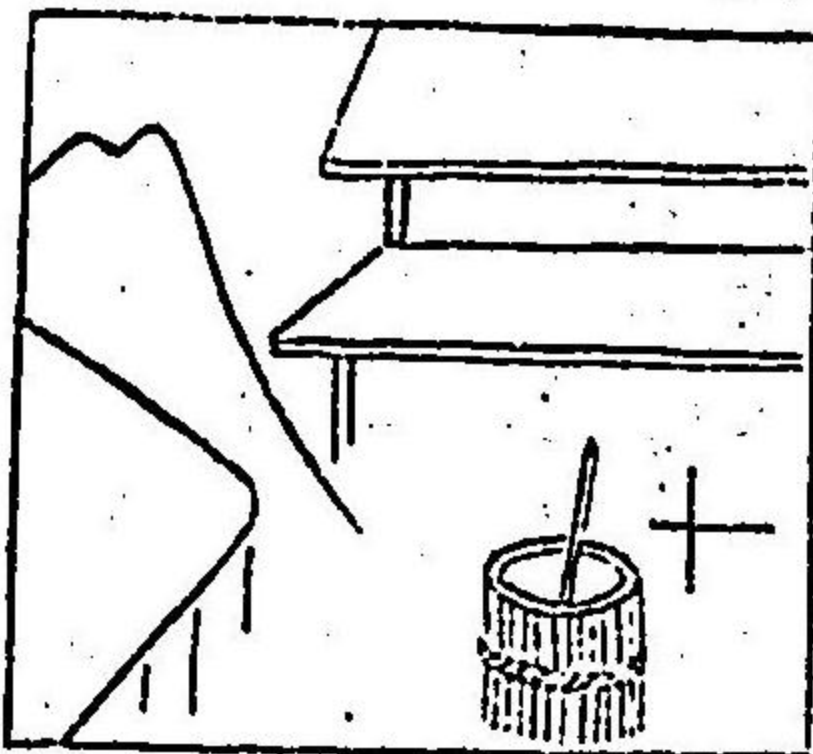
一春狂言の初日昔は二日なれとも今は十五日に限り常の初日は六曜の星をくりて能日に定めると云縁氣にて出せとも正月十五日と三五九月は節句なり七月は十五日十一月は朔日に定りあるなり

惣看板

初日の前日圖の如く残らず看板出揃ふて彌明日は初日となれば「明日より」と云札を出す若し衣裳道具間に合はぬ時は何日よりと札を出す此とき讀はじめと云有惣稽古は本讀終れば直に書抜きを渡して狂言方立合稽古をする初日の前日たはやし淨瑠璃ともに相揃ひて稽古をする事なり

狂言

酒てんどうし

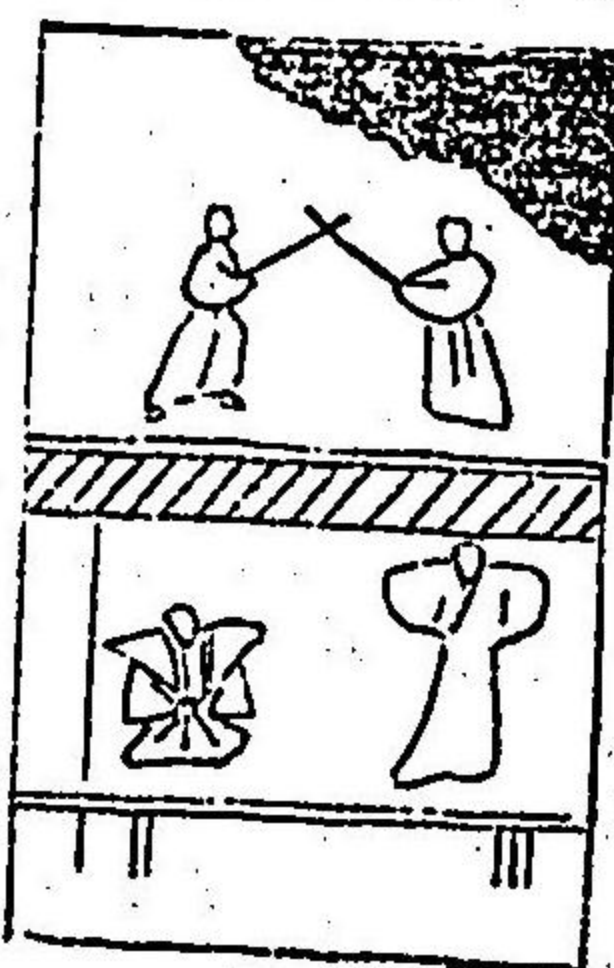


中村座ツキ狂言の看板なり下に委敷記す此看板を通しと云大詰看板にて書組には中通りを出す當時二番目をこゝへ出す顔目世には是へ下ケ札をする此所一番目大詰に仕候と書く

浄瑠璃看板太夫の紋所は紺せうにて書く

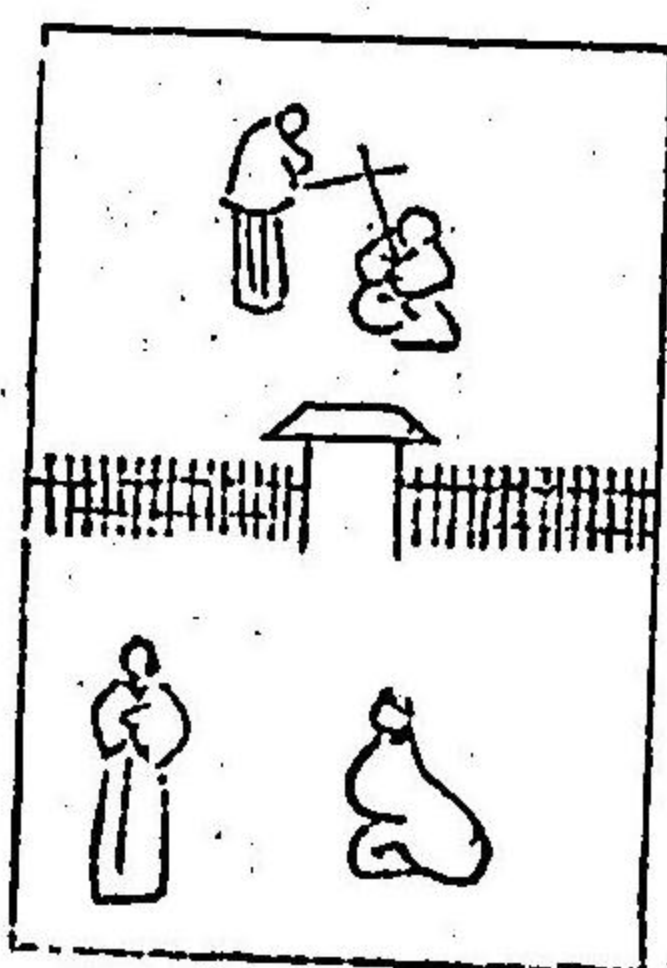


三尺の淨瑠璃看板の書組但し顔見せには下ケ札に四立目に仕候と書くなり

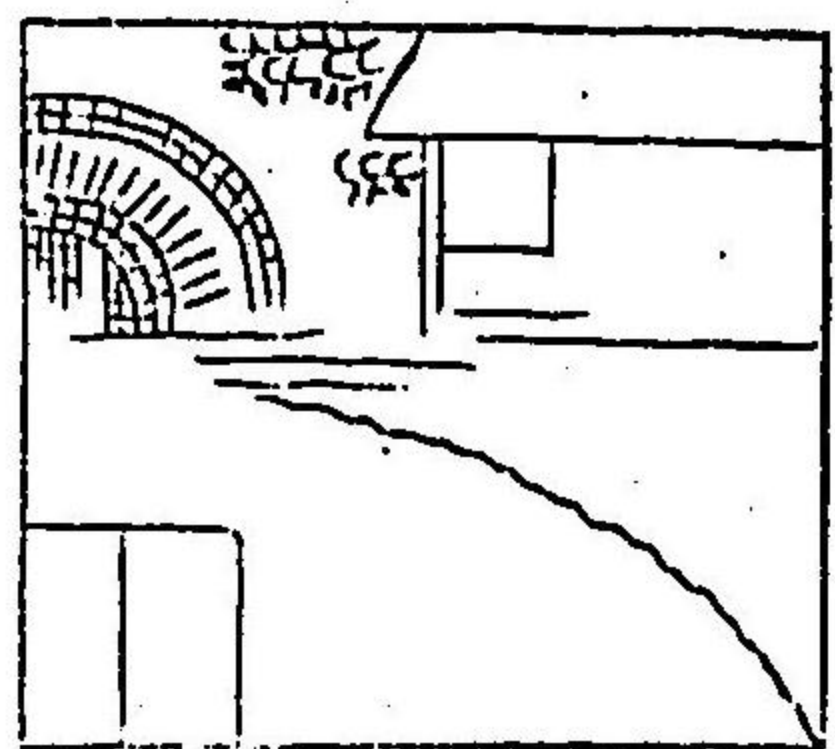


あり尤も立者計りなり

此三尺をすこみといふ是はだんまりか又はやしみのけしき又は返り打らなど凄き場に出す故すこみといふ圖する所は二番なれど大抵三立目四立目幕切りに出す顔見せなれば下ケ札



板の所わ出す時は則此四立目を出す顔みせに下ケ札あり



此看板を櫓下と云櫓下へ出す
故なり是には大立者より詰の
女形に子役も二三人出し中頭
迄を書組に出す
此櫓下看板の左右に顔みせな
れば袖看板として出す尤もし
ばらく當家の書組なり
しばらくの書は鳥居家の流に
究り團十郎の顔にかまはずしかみと云ふなり



此看板は中村座にて戌の春狂言の大名題の上に立鶴
銀杏をくわへて居る是は四人の數を生ものを加へ五
つに數を合せたるなり中村座縁氣の物にて折節扱大
名題には大立者計りを當組に出す前へ切出しにする
も有顔見せには色々の飾りをなす中村座計りは鳥居
を前へ飾る吉例なり外二座は其狂言の趣向にて飾り

有り亦あやつり狂言なれば一人書組に出す事も有尤
も座頭ならでは出さぬ事なり然れども狂言の筋によ
り二枚目にも出す既に却傳内興行の折節八百藏座
頭彦三郎二枚目にて菅原の狂言に一人出せしなり惣
看板の肩に「來る十五日より」と札を張る顔見せな
れば來る霜月朔日よりと書くつね故是なし

第一	第二
第三	第四

是を四枚と云中通り迄は此上はさし書を書異形の書
組ありしか今はなし尤も大立者計りなり
圖する所此役割看板堺町吹屋町なれば西棧敷の入口
の上に有木挽町は北の方に出す看板書組は狂言方よ
り下繪を出す書師は當時は鳥居清長の書なり鳥居氏
代々名人多し中にも清長は當流の上手なり看板の書
詰て過ぎぬ様に書くをよしとす一流なり中村座は仕
切場勘六伴名勘亭と云世に勘亭流と稱す又中戸屋新

役人名替

千秋萬歲	大々叶
------	-----

八市村座は仕切場金井半九郎則
三笑の子なり河原崎座は金井半
兵衛とていづれも當時の能書な
り

櫓下の番附是は初日の前か又は
二日程前か或は初日の朝賣かす
るなり茶屋配りは賣出しより一
兩日早し此書組櫓下看板の書組
に淨瑠璃看板の書組を出す故櫓
下といふ又辻ともいふ此番附を
板に張り書を彩色して人通り繁
き辻に懸け置く故辻といふ又一
枚摺とも云ふ余の番附は三枚と

ちにして織きなり是れ計は一枚にて事足る故斯くは
云ふなり尤二日に配し役割とは違ふ事も有大抵は同
し事なり顔見せには此番附なし尤も閏月有りて狂言
改むる時には出す此書組に次第有り大立者は三ツ其
次の立者は二ツ又次の立者より間中中通りの頭子役
詰の女形迄皆一ツ宛出す又は立者計り一ツ宛書組に
出すも有あやつり狂言には一人の繪を出すも有大立

者ならではならぬ事なり市村座平假名に梅ヶ枝路考
森田座にては布引の瀧に實盛團藏中村座にては葛の
葉に野籬を一人出せし事あり

會我狂言

春狂言に會我物語を仕組事は木挽町山村長太夫座此
は上戸芝居四座有之其後 是にて始て此狂言を出せし所に
故有りて止む今はなし 大評判に依て其後三座にても度々催し毎度大當りな
れば則例となして毎年春は會我の狂言に限る事とは
成りけり是も古めかしく成しを津打治兵衛と云狂言
方の工夫にて世話狂言を取り交へて八百屋七實は
三浦の片貝なり小性吉三郎實は會我の禪師坊など
仕組珍敷故大の當りなり亦金井三笑工夫にて會我に
小栗横山吉田の梅若丸を取組大當りを取しが度重り
はささせざりしを其後芝居の花萬代會我を一番目二
番目世話狂言と譯て三日替りに取組大入を取しは櫻
田治助なり是は一番目會我二番目世話狂言と名題を
二ツ出せしは並木五瓶なり夫れより今は大方如斯に
成たり扱會我狂言に是非共仕組でするは對面の場合
家の場なり對面といふは祐常會我兄弟に初て出合の
事なり貧家とは會我中村はにふの體其外草摺引矢の

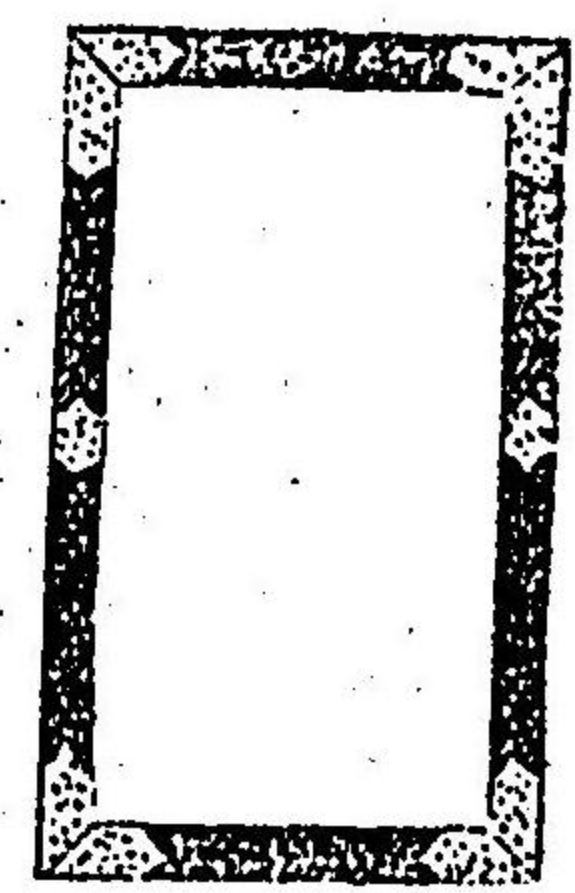
根五郎などあれども是は出さぬ事多し朝比奈は中村傳九郎より作り物好江戸一流にてせりふをぐさりとて外のせりふとは違ふて面白き事なり

二月

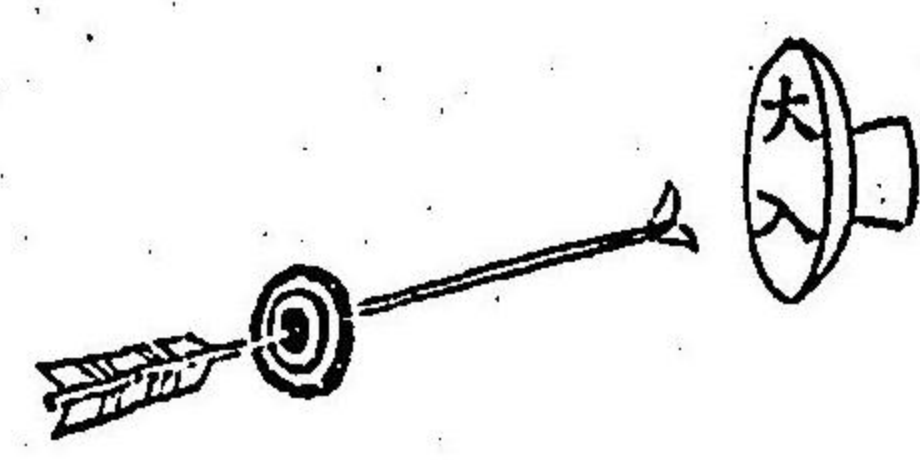
初午三座共樂屋表にて稻荷の祭をなす尤も市村座などは樂やに燈籠細工物或はからくりの人形などお囃の案事にて綾釣座にて京大坂の格に習ひて太夫並三絃等にて人形の衆中二幕位のおどけ狂言有り尤見物人大入なり扱て酒番餅番は春狂言も顔見世も亦是平生にても三階中二階中並狂言方おはやし等迄打込にする亦三階計りもする是は其時の狂言の趣に寄りて五節句亦是十二月に割り付餅番なれば景物に案事の餅を出す酒番なれば酒樽の山を積肴は案事の趣向有り珍味をならぶ景物並傍物を美しく工夫の口上を述べて興を催す幕の間か又は打出しの跡にてする賑やかなる事にて面白き事素人の茶番にても妙なるに名にあふ四十八鷹の寄合なれば悪しき事少しもなし跡を出す

是は狂言の繼ぎの跡を出すには不限正月より見古るしたるは二幕か三幕位の狂言を出して先の狂言へ繼

くの名なり尤も道成寺助六石橋草履打の類を出す枝敷にも花を飾り木戸にはまねきと云ふ看板を出し大茶や小茶やに至る迄のれんを對に拵らへ並桃灯或は櫻の作り花を飾りけしき能賑やかなりまねき



此看板切り扱ともいふなり人形を切扱にして両面彩色にしたるかけ看板なり両面より見ゆる拵らゆるなり



大入看板盃又はからくりものもさま〜あり
當り看板是にもさま〜の案事もあれども先は的なり

道成寺

是にも現在道成寺傾城道成寺とあれども芝居に主にするは京鹿子娘道成寺なり是れを中村富十郎度々大當り有其後道成寺と云ふは京鹿子に定り先の仲藏先の三津五郎八百藏勘彌富三郎久米三郎野鹽半四郎路考瀬川に百千鳥娘道成寺と云有り路考家の藝なり京鹿子より少し品のよきかたにあるとぞ

助六

市川流の藝にして江戸狂言隨一の物なり淨瑠璃は半太夫か始りにて是れをやわらぎ曾我と云ふ其後助六何々名題を出して河東節にてもする然れども中村座なれば半太夫市村座なれば河東節兩用ともするは木挽町計りなり斯く定めたるは助六に限るなり其余は何にても同様にするに知るべし其故は半太夫にて景清道行を羽左衛門致されし時江戸春次が半太夫の三絃なりと嘶にて聞き扱助六揚巻を勤むる役者兩人は芝居懸りの者大勢にて吉原の茶や並遊女やを廻る事古きしなしと見たり此狂言の初日出ると吉原ひるき連中より蛇の目の傘數百進上物として送る是を見物のかたわ關取に出す事とは成けり

石橋

童子石橋まくら獅子あり芝居にては交相生獅子路考しうじやく中村慶子の二々種の所作をなす尤も淺間の淨瑠璃を出す近比勤し人も相生は今の路考先の秀雀執着は蘭耕市松

草履打

中村座にて始めて勤しなり度々出せとも大入なり同座にて尾上常世岩藤松助初路考

三月

さし替りと云ふ狂言の日數余程になればあらたに狂言を替るをさし替へと云是迄評判よければ一幕二幕濟みて出すも有り又其のまゝに節句を過ぐるも有り扱て三月晦日まで大入なりしは一番目曾我二番目隅田川春妓女客性とて宗十郎梅の由兵衛路考小梅長吉の二役なり又春より六月まで勤めしは路考三日替りなり中にもお半長右衛門大出来にて前狂言をつぎて盆よりまた〜大入なりしは珍らしき事なり

花見

三階中寄て種々の器に桃櫻の花を活けて或は櫓の築山などを拵らへみな〜打寄する尤も太夫元より馳

走をする是れは狂言の當りを祝ひ又みなくの勢を謝する心持ちにて歌俳諧なごたのく蕪づくしをして終日遊ぶ事なり

四月

夜づけると云ひて前への狂言古くなれば跡を出すをさし替へとてするなり敵打男伊達操狂言の類を一日休みて直に初日を出す尤も役者小手き多くなければ出来す近比桐座にて夏衣装雁金染を出せし事あり宗十郎彦三郎三津五郎今の伊三郎龍藏男女歳友右衛門傳九郎東花米三郎喜代太郎路考なり上方には折節あれども江戸には稀なる事なり

一話一言補遺卷之八

三座明鏡下

操狂言

儀大夫節五段續十段續を取組出す、京大坂には多けれども江戸にはまれなりしが、年々多く成は残念なり、此の狂言はみくらべ物なれば、立者揃ではなくては、大當りはなき事なり、見くらべとは、其役々に寄て、工夫を付趣向を替、さま／＼にするを、あれがよい是れがよいと、みくらべるなり、其案事の上きもあれば、悪敷も有、すべて下場つき立者揃ひてする事有り、極めて面白く、心を付けて見物すべし、工夫違ひて見物の請は、菅原の寺小屋の場、松王の役先の仲藏今の團藏など致されしが、首實験の場にて、首を一目見ると、はつたりと首桶の蓋を致されしが、毎に評判よし、其許のよきを悪いと云ふは先づ松王病氣と云ふとも、菅秀才を能見知りておれば、今度の役義仕負せ次第暇をやるこの仰、然れば大切の首實験を、唯一と目にては庵末の仕打、是は

一話一言補遺卷七終

我子故見られぬと云心で有らうが、夫では我獨合點したる工夫といふべし、側に居る春殿玄蕃はあれどもなきが如き仕打なり、是を諸見物がよいと云ふは、我子故見られぬと云所に計り氣を付て、此一幕の要は首實験にて、側の春殿玄蕃は敵役と云ふ處に氣が付かぬゆゑなり、淨瑠璃の本文通り、ためつすかめつと語るうち、我子の首と知り悲き餘情は、此淨瑠璃の作者も承知の事なり、又其上奥にて、ばつたりと首を打つ音に、松王せき拂ひか、頭をたたくか、又は提げたる刀を杖に突かして驚くこなし有り、是れも未だ我子ともきつと知れぬ事なれば、疑ひて居るべきに、さりとてはや合點の仕打と云ふべし、尤も人の出入を改め、机の敷を見て、人数より机の敷が誠は二つ多く、是にて不言と我子の來るを知る、夫はよけれど、口へ出して言は松王があやまりなり、若し側の玄蕃か其机を敷へ、六ヶ敷からんと、是れも作者は承知なれども、我が子の來る事を知らざる爲に、言はせしと見たり

工夫が能て見物へわからぬは、平坂無間の場なり、路考梅が枝の役、尤も市村座にて二建目なり、源太

を偽り返して、眼になり思ひ入有りて枝折戸を建て合方迄に接續そろ／＼と座敷の上り、火鉢に寄りて色々工夫をする此間に唄あり不意に奥の客を殺して、金を取らうと云思ひこなし有りて、奥へ行かうとして立ち上り座敷へ行其橋迄行く、こわけ立ふるへて、一足も行かぬ、故に座敷へ歸りて、しらふでは行かぬと云こなし有りて有あふ鏡子無理に酒を呑む事有りて、短刀の様成る物を帯け挟み、鬼に成りてもと心を定め、すつと立忍／＼て橋を行き、きし／＼と橋がなる故、打懸けをぬぎて橋へ敷、此上を一足二足歩むと、亦ふるへる故、思はず是にてすべり、座敷の縁頬へ落る、直に座敷へ這入て、人を殺す事若し仕損じては身の大事、此心をは止めて、是より女心の情にて頼まんと、守袋を出し押戴き、稻荷さんねをしさんと色々くごき言を云て願ふ此内は時の是を指折敷へ、七つ故びつくりして、不思議守袋に火鉢に落し、焼るを知らず源太が出陣の事を云うて居る、所詮神佛の力ならでは叶はぬと、守袋を見れば焼失せる故、亦びつくりしはや七つといひ、願ひをかけし神々の守り袋の火に入て焼失たるは、此梅が枝が祈る神も佛

もないかやど、是れより大泣になく、色々身をもたに苦しむこなし有りて、漸々に心を付、水を呑んど手水鉢の際に這寄うちも、息されるこなし、此内もごふぞと金の工夫をして居る故、手水鉢に向ひ顔の移るを見て、無間の金と心付、飛しさりきつと成りて、無間の引事のせりふに成り、夫より鐘をつく、狂ひ立廻り、是迄古今まれなる大出来なれども見物は只永しと倦有尤の事なり、わからぬ故か、たとへ何の道にても名人上手の上にて、よいと思ふ程の事は、其道に入りし人といへども、不才なればわからぬ勝なり、一通りの見物には、其はづの事、淨瑠璃を抜て、歌舞伎の様に一幕位する事も有り、是れ又かふき狂言にても、義太夫を入する事もあれど、役者は江戸ものかはなき事なり

五月水仕合

此月は暑さはげしければ、夏衣装にて出来る狂言か水仕合か雨の降る狂言を取組みて出す、水仕合は舞臺の前へ、二間に三間ほどの水船を入るなり、雨を降する頃は三階へ水を汲上、竹ごひにて舞臺へ雨をふらす、尤も舞臺前の見物には、薙を渡して置き、

狂言は伏見の喧嘩、又は道風が蝶場、又は忠臣蔵の五段目か、菅原の荒場の類なり

曾我祭

毎年春より、曾我物語の大當りなれば、五月廿八日曾我兄弟の當日なれば迎、中旬より曾我祭りごと、一座祭りの通り花を飾り、女形はきたんばやし、子役は花笠踊り鎗踊り、立役は雀踊、其外様々の仕出し有り、又俄といふ事有り、日々新たに趣向を出し笑ひを催す、花出し踊、家楽角方など有り、廿七日より仕切場に、御神輿を飾り祭禮の式有り、久敷二丁にはなく、木挽町に有り、曾我兄弟の宮芝居の三階に勧請し奉る、市村座のは坂東三郎勧請なり、河原崎座のは尾上松助勧請す

俄

京都大坂の俄とは違ひ、又江戸吉原の俄とも違ひ、此俄の地口は狂言にしてみせる、たとへば鹽谷判官の前へ、力彌三方に艾を乗せて置き、た日からも宜敷と云、判官これを見て、力彌山良之助事はと云と力彌未だ參上致させぬと云と、判官視箱を出し、たのれがへその兩際に灸點にしるす、亦力彌とはげ敷

云て、由良の助は顔見合はせ、力彌愁て何と未だ參上させぬと云、判官是非に不及灸を一つのせて火を移す、齒を喰べ苦敷こなし、此内向はた〜にて由良の助出て來り、謹て手をつくご、判官由良之助かと云、ハットいひ、是れにてうしろから何だ〜といふ、判官かわ切と云ふ

六月舞納

春より打ちつゞき興行、此月六日七日の比舞納をする、尤も日を撰事初日の如く、若し日悪しければよき日迄、毎朝番立下に印計をする事なり、千秋樂とも云ひて二三日以前より、木戸の札を張來る、幾日めて度く舞納と書き、さなけば芝居休をつぶれと云ふなり

土用休

舞納め日木戸の札を出す

來る七月十五日より新狂言仕り候

最も板にて、櫓下に出す、極月休みには、來る何の正月二日よりと書

船振舞

木挽町の芝居にて、來年居なりに頼む、役者は太夫元同道にて、船遊參に出るなり

土用芝居

芝居休の内なれども、稽古の爲めとて立役壹兩人、間中通りを交、稜釣狂言亦是古人の大あたりの狂言を出してする、是れも出世の筋なれば、毎年有たき事なれども、定まりなし

七月盆狂言

十五日より始る、殘暑強ければ、大立者は不出、假に操狂言の類を出す

八月八朔

八月には、温泉よりみなく歸り、大立者も打ち揃うて出る、尤も七八月は、見物薄き時分なり、此の月顔見世の極り有り、亦春より極るも有り

月見

待宵より、仕切場にすゞきを飾り、名月の酒宴有り、仕切場と云は、表の入口の右の方にて、機敷、土間樂やの事とも一切さばく所、尤も帳元、左座、右座と列を定め居るなり、又表ともいふなり、向の事は

皆仕切場なり

九月名残狂言

役者入替りの前なれば、上方へ登る人は暇乞ひとし
て、名残りを出す、己れくの手覺の當り狂言なり、
蘆屋の子別れ、戀女房の道中双六、淺間七變化など
なり、亦是は新に所作事を出す、何れ當り狂言なり

顔見勢世界定

是をはなし始とも云、九月十二日の夜、太夫元が、
茶屋にてする、貌みせ極り、座頭、女形の重役立の
作者寄合、相談の上何の世界までも定る、尤も至て
内々の事にて、平生と違ひ、是を秘す、先世界とは、
何時代を作らんと云事なり、たごへば小町、將門、
頼光、奥州責、保元平治、伊豆日記、義經記、時頼
記、太平記、太閤記、右の内は役者を見立て作る、
亦座に寄て、何の世界は何も當ると、縁義なる事も
有り、此夜芝居并茶屋中役者紋付の挑灯をいだす
事

十月役者附

十四日頃に出す、立役立者間中中通り迄、書組に出

してしるす

踊始

此月十七日の夜、振付師並長唄、三絃、おはやし不
殘舞臺へ出役色子に始て振を教る、是れをサンと云
ふ、梅か枝大踊り甲咲大踊りの類なり、都合三度子
役色子振付師と一所に踊る、其後何にても目出度所
作を一ツ二ツ有り、此内尤も太夫元、頭取は上下に
て舞臺にならび、踊濟次第太夫先にみなく三階へ
揚る

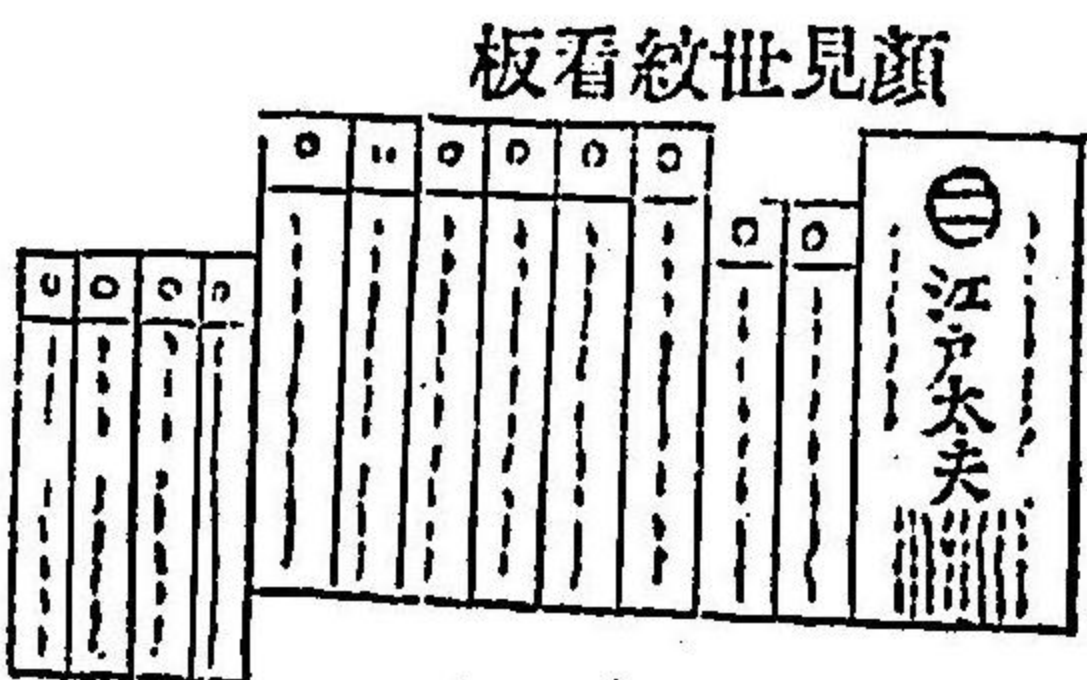
寄始

同夜、顔見世究りの惣役者、初て寄りあふ名なり、役
者銘々の居室の門口に、挑灯數多出し置き、芝居に
ても、挑灯出す事なり、惣茶屋中よりは、立者の宅
に迎として、賀をつらせ、挑灯を連ね、花やかにし
て大勢行と、立者の宅にも酒肴を出し、祝ひて、打
ち連れ賑はしく芝居へ来る、扱て三階にて立者より
中頭、并女形不殘、立作者上下にて、其餘者袴羽織
にて、座席を正しくならぶ、太夫元、若太夫上席に
て、床の間に標幕を飾る、市村座にはは鷹様とて、

鷹の齋を羅物に懸る、太夫元より銘々の土器をさす、
口取是を取次毎に肴に調を賀す、至りて丁寧の禮式
なり

紋看板

十月廿日には、出居なりの役者を出す、新抱の役者
狂言方、お囃子、振付師、若衆迄不殘出す、尤も居
なりにても、役名なれば出す并甲乙あり、



此淨瑠璃を立者と間中との間
に置有又間中と中通の間に置
も有り
此間に立者又は作者などを出
す事有り此二枚緑青の紋雌黄
の中通りの看板
本朱紺青紋金泥之者也
此四枚陣番紋金泥にてくまり
本朱は立者なり

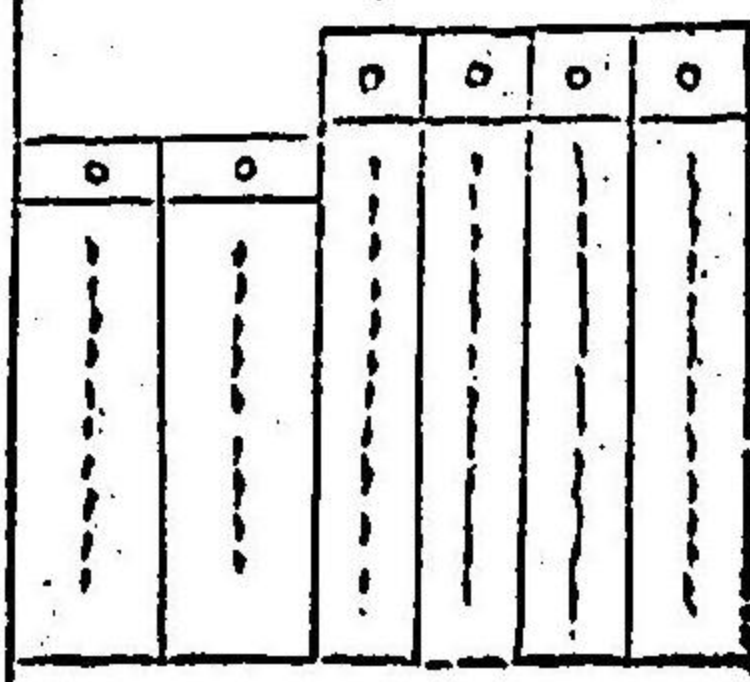
してしるす

踊始

此月十七日の夜、振付師並長唄、三絃、おはやし不
殘舞臺へ出役色子に始て振を教る、是れをサンと云
ふ、梅か枝大踊り甲咲大踊りの類なり、都合三度子
役色子振付師と一所に踊る、其後何にても目出度所
作を一ツ二ツ有り、此内尤も太夫元、頭取は上下に
て舞臺にならび、踊濟次第太夫先にみなく三階へ
揚る

寄始

同夜、顔見世究りの惣役者、初て寄りあふ名なり、役
者銘々の居室の門口に、挑灯數多出し置き、芝居に
ても、挑灯出す事なり、惣茶屋中よりは、立者の宅
に迎として、賀をつらせ、挑灯を連ね、花やかにし
て大勢行と、立者の宅にも酒肴を出し、祝ひて、打
ち連れ賑はしく芝居へ来る、扱て三階にて立者より
中頭、并女形不殘、立作者上下にて、其餘者袴羽織
にて、座席を正しくならぶ、太夫元、若太夫上席に
て、床の間に標幕を飾る、市村座にはは鷹様とて、

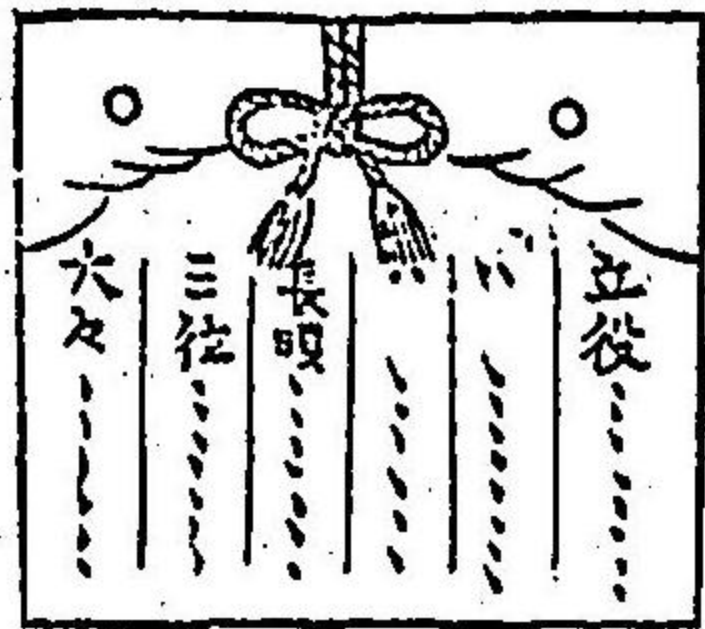


是れも立者は本朱紺青金
泥是より中通り役番本朱
くまり雌黄
此まへ大立者の看板四通
りある事有り一通りには
置す作者も同じ

前淨瑠璃同断

来る霜月朔日より

立者より中通り
看板銘々の方へ
此札を張る



此看板一繼にて役なし上は幕を盡くみ若衆並おはやしの見習ひを出す尤も下へならぶるなり

大立者は櫓下四枚の出す、若居形りの役者多き時は、櫓脇へならぶ、尤も立者看板と間中とは、大きさを違ふ時もあり、又立者より間中まで同看板にて双ふ様に、次第を定む時もあり、何れ中通りは看板小さくして出す、亦坐に寄て間中の看板は紋所の縁背にてかく事有り、三枚目の作者より、お囃振付師、みな中通りの看板に出す、組おはやし見習は、若衆と同様に出すなり

改名

不断はなき事、先顔みせにおもに改むる、是れも親の名か、又は師匠の名か、由緒の人の名になる時、改名祝義の附届あり、尤も其立役の格に寄り、夥しき事なり、然れども負もつき、役からも違ふは先

人の照りなり

名題看板

同二十三日に出る、常とは替り、作り花を飾ることなり

揚すり挑灯

顔みせには、土間の上へ三廻りに挑灯を釣り、立者より間中、並女形、不殘銘々の紋を付け、芝居町内茶やよりも挑灯を出す、茶やの紋は銘々の定紋と、太夫元の紋とをつける事なり

顔みせ燈籠

十日晦日より、霜月三四日比迄あり、二丁町木挽町の表茶やのひさしの上へ、絹の張抜にて、さまざまの作り物を出す事なり

積物

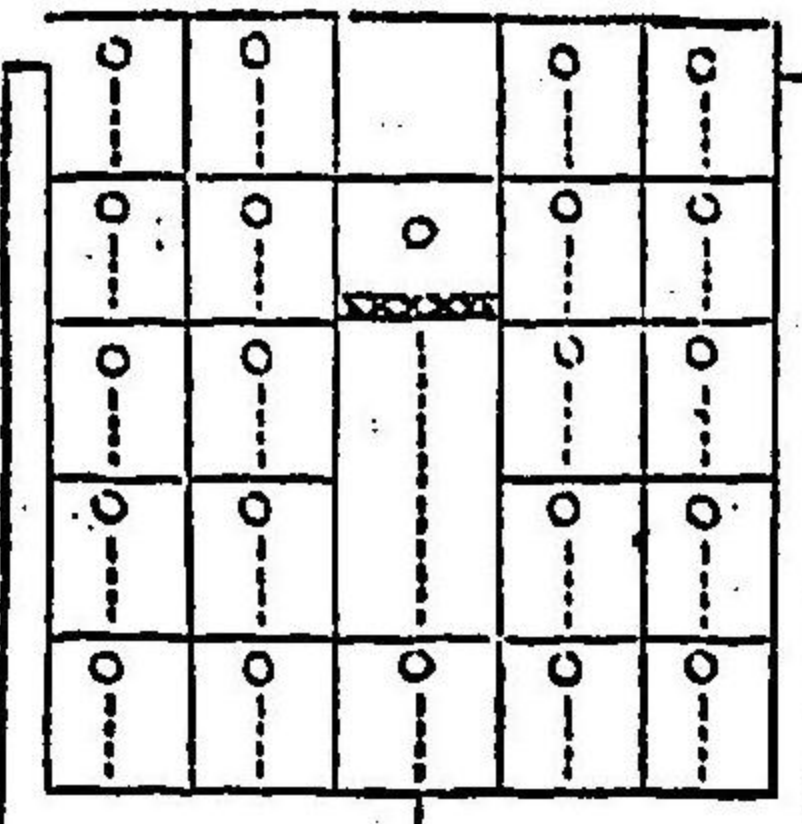
ひのみき連中より、役者中へ進上として、米俵并酒樽、蒸籠を山の如く、是に引幕、衣装、上下を取り揃、芝居の前へ飾り置き、同夜芝居懸りの人、大晦日の如く諸事取引するも有り、元日の如く雑煮を祝ふも有り、何れた客へは、雑煮盆を出す事、正月の例の通りなり

手打連

同晦日の夜盆負連中みな打揃へ、役者の宅に行き、祝ひに手を打事有り、朔日には舞臺へ初めて出る時、土間に大勢ひのみき居双ひて呼ぶとめて祝ひ手を打つなり

一番太鼓

同晦日夜何時にても、芝居にて給金並諸入用の勘定を渡し次第、一番太鼓を打と、其音常に替りいさましく、扱此太鼓を打と、木戸にて聲を上る、是を年中第一の手からとす、何の比よりか式三番更始まるまで、見物芝居へ這入りて聲を遣ふ例とす、



女形三枚目の席此所に立役を配くは客分にして甲乙なきが爲めなり櫓下は立役四枚より以下の位此所の番
女形四枚目の座なれども立役四枚目より以下位を争ふ人を此所に置圖する所の役割付同し位の三人有り是に甲乙を付けるは悪しき事有なきが爲めなり

十一月顔見世

一話一言補遺

此月は、是迄勤めし役者を入替、下り役者又は女形より立役になり、あるひは改名給金などの出世あり、新らしき貌見せなり

番立

顔みせには、三座共三日の間は、式三番更をつとむ、市村座は朔日の面は春日の作、衣装、厚板、唐紙一通りの三番更、二日目の面は出目の作、三番更は多ほしなり、三日目の面は同出目の作、三番更子寶を如此、首より三日の間替る事例なり、餘の二座は一通りの式三番更なり、毎朝朝の太鼓を打と、表の木戸にて聲を上る、是より番立とて、若衆三番更計りを初む、繼ぎて脇狂言を始めるなり

脇狂言

其いゝに持狂言有り、至て雅なる物なり

脇狂言中村座

酒呑童子

ほうろく聲中村 此ほうろく聲は前太平記の狂言のごき、酒呑童子にさし合たる節に遣ふ

同市村座

七福神

竹生島の長者口を遣ふなり

同 森田座

大 社

同

都 座

是は席開き成りしを、脇狂言となす、那須の與市馬揃ひ

同 桐 座

是看板には出せしかど、故有りて出さず、また老松と云ふも有、壽二人狸々

同

河原崎座

名題計は、むかしより出す事あれども、狂言右の内所作傳はらず、近頃新たに作り出せり、所作淨瑠璃唄あり、當時森田座も、都座も、河原崎座のはあたらしきうたひ物なり、桐座のは古き物なれ共出ず

酒呑童子

『めしよすな、しばらくありて奥より、大格子の織物に紅の袴を着、鐵棒を杖に突き、あたりを睨ん

で出たりしは、身の毛もよだつばかりなり、語れ聞かんと申ける、此間せりふ、酒と雉子を祝ひ先客僧達にこなたへど、椽の上にぞせうじける、合せりふ、童子盃を取り上て、一つ請てさらりとほし、頼光にさしにける、肴はなきかと有りければ、今切りたるとたばしき股を腕を板にのせ、坐敷へこそは出しける、それがし拵らへ申さんと、腰よりさしぞへすらりと抜き、しよく四五寸切て、舌打ちして参らせける、合せりふ、童子は返て頼光をさひはいてこそ嬉けれ、合せりふ、鐵棒を杖に突き、はつたとにらみて立ちたりける、合せりふ、誠しやかに□□□□は、合せりふ、殊更持參の酒に酔、唯操事と思召、我も御身の其姿打ち見ては、たそろしげなれど、馴と馴れて、強ひは山伏うたひかな、出口心つき奥をさしてぞ三重、

七福神

『夫れいさなき、いざなみの夫婦より、合まんくたるつみに、天のさかほこたろさせ給ひ、引上げ給ふ、其下したよりこりかたまりて、一つの島と成、月よみ、日よみ、蛭子をさつみもふけ給ふ、ひる子

と申すはゑびすが事よ、骨なし、皮なし、やくたいなし、三年足立給はねは、ねかへりくく来る船に乗り奉りて、青海原へ流し給へば、海をゆづりにうけさせ給ひ、西の宮のゑびす三郎、いとかしこき釣針たろし、萬の魚を釣りつゝ、た姿はいとしほらしや、引けや引けく、ひく物品々、さまがきはすみ、ひは、琴、鼓弓、三弦、しのめ横雲、そこで引け小車子供達とされ寶引しよと、帆綱打ちかけ、寶船引いてきた、いざや若衆綱引まいか、沖に鷗のぼつと立つたは、三人張強弓ひよひきひやうと射落せば、浮きつ沈みつ浪に揺られて、沖の方へ引との水無月中ば、祇園との祭り、山鉦飜り、渡り拍子で引いて来た、合拍子揃へてうてや太鼓の音もよさ、なるかならぬか山田の鳴子、音はからころかよりころりくからころくくといばみ揃へて、神のじゆん馬を引連く、いさみいさむや千代を御神樂、合神の利生はつけの櫛、引く七三三繩のながさるにしを、

早子持 長者ひらき

『早子持に、聲取りすまし、中に立人誰々なるぞ、

事もたろかやゑびす三郎、扱又料理は布袋、福録、侍女郎はきりやり自慢の辨財天、十二の子女郎か酌にて、床盃をとり持させ給ふや、金銀數々福徳ぞくく、家藏萬々億ぞい、孫彦やしや子にかへつくひつつくさつさるひ、さつさく數の寶をく船に車に不二の山じやぞく、不二はとく拍子揃へて、手拍子揃へて祭ると宵で叶ふたり、千秋萬歳末ぞ久しき、

序 開

若衆計りにて勤む、尤狂言替りめ毎に、あらたに作る、竹田狂言の趣向有りて、わかしみを加へ所作も有、外坐は宮神樂岩戸にて仕舞ふ、されども席ひらきは、其格、餘の狂言とは事替りて面白事多し、

二建目

是を二つ目ともいふ、中通り計りにて勤む、狂言席開きとは事替り、むほんの見出し、所作事もあり、花やかにて面白し、此二度目にも格有りて、三建目とは違、外坐にも遣はぬ物有り、近比は好より出る事も有、

三建目

これは上方にて、發端と申し事なれば、一日の狂言の糸口なり、是よりみねばわからの事あり、立者いつる故究めて座鎮りてよし、三建目師とて重に三建目計勤むる人有り、貌みせにはしばらくなり、

しばらく

市川流の藝なり、貌みせに限る、狂言江戸風土に叶ひし物なれども、近ごろ少なし、市川の門弟には、是を勤る者多し、亦市川家橘は、至て拍蓮をせらびせられし故、しばらく二度つとめられ、今の彦三郎も致されしが、暫のすわうは、柿色に三升と定る、又無間には結綿の紋に限る、是則江戸の花なり、亦一度は家橘もかちんにて致されし事あり、是は拍蓮もかちんにて致されし事有ば逆なり、紋はうづまきを三升につけられしなり、**市村家橘**なり、**風小六**、**雛助**なども市川流を慕うて、改ため、家橘とたなじくつけしとなり、市川流の矢の根、助六、面打、不動の化身を多く勤められしが、是皆上手名人なり、市川門之助は事替り、素袍の紋、かつら元結等三升とは少し違ひ有り、

十一月

十二日には春狂言の世界、春の會我の相談日なり、

十二月舞納

十日頃には、貌みせ狂言舞納、此日は皆々芝居懸りの者ども、役者に替りて勤む、たかしみ有りて見ものなり、

市の飭物

同十七日には、春狂言の趣向を作り物にして、口上看板を添、仕切場へ飭り置くなり、

外座之部

ちよぼ

かぶきにて、義太夫などを語るを、ちよぼといふ、淨瑠璃本へ紙を印につけて、印するをちよぼと云ふ、

幕三重

操狂言の幕の内に、三弦を弾て居る、是れを幕三重と云ふなり

シャギリ

歌舞伎狂言幕をしめると、直に太鼓笛にて囃子を、シャギリといふ、操狂言には幕三重ありて、シャギリを打す、今は頻りに成操にてシャギリを用ゆ、

錫杖

六部の出に遣ふ、唄もあれども、今は三弦ばかりなり

合方

世話時代ともせりふの内始終つかふ、是にもあつらへの合方とて、鼓弓、琴、尺八、愁には篠入とて、笛をもつかふ、此外様々有

ぬめり

出唄の事なり、娘の出、た姫様の出、奥女中の出、武士の女房出、世話女房には、めりやす笛にする、傾城の出には、鳴物入にても出る、何れ見計ひなり

出遣入唄

奥の口より出、または兩名向ふこに入る時の唄、直に合方へ取る事もあり、此唄二色ともむかしは四季をわけて文句ありしが、今は定まりなし

獨吟

立唄計にて唄ふ名なり、江戸一流の節にて、随分花やかなり、尤も新唄、ふるき唄もあれども、是れは稀れなり、近比上方の唄をうたはしむるは無理なり、唄の勝手が違ふなり、故にうたふ人の迷惑なるが、

耳に直に知るなり、矢張り江戸流のめりやすと云ふが面白きなり、其上並木五瓶近松門喬などが唄の本に、著述と印あれども、芳野山といへる本に、五大力東金の雪など見わたり、此外にも色々有り

唄淨瑠璃

富士田吉堅楓江世にいふ、奇なる妙音にてさまくの唄とも有、元は佐野川千藏といふ若女形なりしが、立唄となり、世に長唄の流行せし人にて、其中にも唄淨瑠璃と云ふ有り、安宅の松、閨の卵の花の類なり、百夜車は一仲より出たる物、綱手車は長唄とあれども、セツキヤウの襟有、墓寺小町は新らしき唄鼓子唄と印て心を用われしなり、先づ唄淨瑠璃は唄にて淨瑠璃の趣多し

不勢

是れも立唄の役、土手場、藪奥と云ふは、大念佛なり、小むろ節、順禮唄は大勢にてうたふ

豊後節

常盤津流は、都一仲より出し物にて、又一流に成りたるが、富本なり、二流ともに流行もの故に、一幕つとは此の淨瑠璃にて所作事有、囃子も入、此外と

ふり囃子、平生はやし、紙砧の合方入、地獄の後ろなど、様々有、狂言の趣向に寄て、新しき事夥し

トロ〜

妖術、變化、運氣亦は龍女の類、すべて物をあやしみ見とがむる所などに、かすめて打を薄ドロと云、是せりふの邪魔にならぬやうにするなり、または雷の節は、はげ敷打間に板を受て打なり

ゴン

時の鐘の音なり、幕あきに多く遣ふ、時代御殿の場には、ときの太鼓なり、ドンドンドドドドンと打なり

忍三重

一挺にて、引すこみに遣ふ、闇の場、返り打、人を殺場、世話の忍の出なり

三重

離の場に遣ふ、愁の有は愁三重とも、早三重、長三重、銀世界の行平の狂言に、宗十郎行事の役にて、切落しの場、花道の間に有、何れも立三弦の工夫にもよる

行列

京大坂にてしら入と云、工藤の行列、又は尾上岩藤

の出、三弦の内にはイホウと云

在郷唄

てんつゝは是より出たる物、世話場に遣ふ、在郷唄三色有、唄のなきをてんつゝと云

琴唄

時代御殿の幕あき、亦是道具の替る時用ゆ、端唄、組唄、又は獨吟の新物も有

大ざつま

暫くの時用ゆ、又は朝比奈の出、居變化道行、又は長唄と懸合の所作、羽左衛門忠度、路考が土くもなごも有

すがとぎ

助六の狂言、其外吉原の廓クラの氣色の出這りに遣ふ

さわき

むかしよりと云は、「土手の挑灯吉原計月夜かな」書いたかしくは釣針の、つられくる〜郭五丁町イサヨイ今イは働いたこの類を、見合ひ〜

ねとり

幽霊の出に、吹笛にてドロ〜に更て吹、すごき物なり

遠よせ

むほんの張本人を取りまく、責太鼓なり

ドン〜

右の太鼓を、けはしく打事なり

山たろし

山の道具に遣ふ、大太鼓なり

雪たろし

しゆくわんのがんくつの幕明に用ゆ

浪の音

浪幕の道具に遣ふ

せうでん

祭の出しに有はやしなり

トン〜カ、

同かんの囃子立などに遣ふ

たごり地

三味線のたごりの地方に遣ふ

鼓の合方

落合前立役などの出に遣ふ

つゝ懸

現参〜に遣ふ、賑やかなる物なり、市川流武者の

出に遣ふ、不殘是なり

出端

石橋の幕明に遣ふ

欠入

まく切見出しの出、亦是片シヤヤリ、つゝ懸等さし合の時に遣ふ

セイ

颯入にて、本行の通り、山家に住居る鶯のせいれひなどの類に用ゆ、或は慈童の眠り居る、静なるに遣ふ

早笛

出もの見せんと云まゝにと云時、あれの鳴物、亦是忠臣藏五段目の猪の出、すべて獸類の出這入りに用ゆ

巢籠

忠臣藏九段目に遣ふ、笛より勤む

相の山

鞆弓入りにて、八百屋た七、或ははんせん香、物草などに遣ふ

和讃

地藏經の類を立唄より勤む、あはれたてすごき物なり

畜生の人を變化して居たるが、俄に形をあらはす時に遣ふ、狐犬神の類也

辻打

水茶や、見世物芝居などのかざり付、口業の三弦より出てたるもの、兩國山下などの模様遣ふなり、揚弓の音

辻打の間に遣ふ、亦別にも用ゆ

和歌

詰合の幕切に、立役、敵役宜敷並び、旁々さらば片シャギリ

一番目大詰に、座頭是より二番目始まりさやうに御覽下さり升うと云時、うち込太鼓なり、是れをきつかけ、表の木戸にてあをりと云有、あをりの事前に出たり

トヒヨ

トヒヨとは、外座つきの名にて、いつれ鳥の聲、雁、鶯、時鳥、鷓鴣、千鳥、雀はあの一其笛を以て調ふ

天王立

忠臣蔵大序の幕明き、すべて大内の最初に遣かふ

太鼓調

上使の用に用ゆ

序の舞

しつかと舞のは、また早舞と云立に遣ふ、またちうの舞と云も有

肥前節

ものかたりの場

樂

近比二挺かけにてひくも有り、時代御殿のは又太鼓入を小太鼓と云

唐樂

唐僧の出、唐の天神などの後ろなり

音樂

佛めきたる所、天人の出、日覆よりちらちらと花を降らす

管絃

時代御殿の場、宮中などに、紅葉狩りの歌始に有、是と樂と間違る事有

はやめ

水氣の立時、又は無間の金の合方

のつと

神たさめ、亦是神たらし

あばれ

顔見せ狂言の、なます坊主の出に遣ふ、笛太鼓にて花やかなるはやしなり

ながし

化身の出、または押出しの時遣ふ、賑やかなる物なり

さらし

花道より引臺を出して、此うへに五郎、朝比奈、又は辨慶、牛若など乗て見よくにらむと、本舞臺まで綱にて引内のはやしなり

白囃子

水打ともいふ、幕明とき、奴の四人詰水打の場なり

渡柏子

祭りの囃子を取合てつくりしものなり、大勢の奴の出、雀踊りの出、又は團七舅殺しの後ろなり

禪の勤

藪疊、山門などのかざり付、又合方入にもなる、或はこしらへ物にて、雛助山門の拵らへ、せり上げの類

鳥追通り神樂

鳴物の名なり、鳴物はたはやしとて、大勢にて勤むる、奥の口に居ならび故に下座ともいひ、後ろとも云、兩側樂の兩かわに居て囃子の數多なる中に、鳥追、通り神樂の類は、春狂言ならでは不用、たとへ秋にても、春の時候の狂言をするとも用ゐず、其故は昔は出唄にも、四季をわけて春の娘、春の女房、夏の女伊達男、秋の娘、秋の女房など種々有りしが、今は是等の事はすたりたれど、鳥追通り神樂のみ、昔のかたち残りて面白きなり、通り神樂は太神樂、鳥追は鳥追の三弦出遣入に遣ふ

囃子

江戸狂言の第一の物にて、今京大阪の芝居にてあれども、十が一のみ、先づ其の大概をしるす

岩戸

忍の出に遣ふ、亦序開きに多く遣ふ

本神樂

是は本業の神樂にて、時代の上下の立廻り、又は木のうろ切破りて出るか、恐の時用ゆれども、一體むほんの張本人と云杯に、おもくとしたるになければ不造

宮神樂

時代世話共、宮地境内の場の出遣入に遣ふ、また序開らきには出唄のかはりにこれをもちゆ

大柏子

宮地神子の場、狂言の趣向に寄て、是迄の神樂皆合方入にもなる

三保神樂

曾我兄弟工藤對面の場につかふ、是はそのむかし何某といふ笛の達人、駿河の國へ至りし時、三保明神祭禮に逢ひ、其囃子あまりにたもしろく、心におぼね歸りて、是れを作り出すより始まる

夜神樂

恐の出で、めづらかなるに遣ふ

さかり

前に云、天王立に加へたる物、よく勅使の出遣入に

遣ふなり

外座付

鳴物一式、きつかけを認めし帳なり
一追善狂言
中句多く出す、年回に當る親、又は師匠の追善なり、尤も立者ならねばならぬ事なり
一天神祭
二月廿五日、市村座の樂やに有、坂東彦三郎當時菅原の狂言上手なり、昔中村七三郎精進して勤めしとぞ

一話一言補遺卷八終

一話一言補遺卷之九

○教訓書目

脇坂義堂と云心學者、所著をしへの小櫃二卷寛政成安京那あり、其本の末に、浪花割板

やしない草

同二篇

をへしの小櫃

福神教訓袋

教訓遊ひうた

わか守り

かなめ草

前訓

安樂問辯

教訓もて遊ひ

朝倉新話

我つえ

御代の恩澤

心得くさ

子守うた

大和詩經

盲安杖

孝經童子訓

民の繁榮

爲人抄片假名

おにはそと

大和西銘

廿三問答

工夫の近道

賣卜先生様儀

同後篇

間のあたり

雨のはれ間

雨やどり

夜話莊治

今はかり

見せはや

孝子萬吉傳

孝子儀兵衛傳

孝子留松傳

松翁ひとり言

むつまじ草

女訓姿見

和論語

春ひより

案山子草

明德和歌

ありへかより

大學明德記

御代の恩

食事五思

五穀無盡藏

日なし用心抄

齋家論

新實語教

何よりの事

身體柱立

道二先生道話

同二篇

都鄙問答片假名

撫育草

安樂傳受

金うるの傳受

心相問題義堂夜話

福相になる傳受

和合長久傳受

五用心慎草

孝行に成るの傳受

金のなる木の傳受

あつめくさ

同二篇

同三篇

同四篇

- 同五篇 同六篇
- 同七篇 同八篇
- 同九篇 同十篇
- 同十一篇 同十二篇
- 同十三篇 同十四篇
- 同十五篇 俗字指南車

右著述書目なり

○巢鴨菊見

文化七庚午年十月朔巢鴨菊見

朔日天氣よし、大府よりまかりて、すこしの暇あれは、巢鴨の菊見むとてゆきしに、花未だ盛りならず、群芳園植木屋三郎のあるじにとふに、今年は十月十日立冬なり、いづれ立冬の節の頃ならでは、さかりならすといふ、西施白の花ははじめは黄ばみつよく、あまざる雲の花は青く見ゆあまざる雲千座の名付けし菊なり白菊のはしめは、いづれも色あるものなりとあるじのいふ、あるじ花曆考といふものを作れりて見す、いづれにも當時の郭橐駝なるべし、さて群芳園にて去年たのみ置し長島侯増州齋出來たりとて贈れり、漁父の圖に替あり。

○京都流行うた庚午

十月二日白木屋來り、京都よりの文通を見せ申候當時はやり唄
松の千歳はあやかりものよ青葉はまして落葉さへいもせ變らぬ契りとはうれしからふじやないかいな
蕪子する身はよくばりものよとぼしはましておやまよりお客たらしの枕だこにくてらしいじやないかいな

祇園町のたいこ仙八と申すものたのまれ候て一本めのかへうたをつくり申し候へば殊の外嬉しかり少しの内に新地まではやり申候「ふたりいもせの約束

一本目にはいろの世の中

二本目にはにせのえん

三本目にはさはりなく

四本目には首尾を待つ

五本目にはこけんかなへて

六つむつまじ君と我しは

しもはなれぬ魚と水

七本目には人目恥つかし

八本目には花のかほ

九ツこかれしその日より

十てとけたる閨の紐長かれと馴染み重ねて戀ごなさけのありたけを語ればかたる相ひ惚れの中なほいつまでもかはらしと誓ひし言葉は忘りやせぬ連理の枝の幾千代しけりてめうとの契りはめでたやな

此節祇園新地おやま藝子中より歌右衛門へ暮つかはし申し候とて昨日出來上り申し候三條大丸へあつらへ幕の模様はきおんまもりに千羽鶴のちらし彩色見事に御座候此年中村座願見中村歌右衛門さま祇園新地ひるきと書しるし有之候大かたちかくにくたり可申間御覽可被成候歌助三の追々殊の外評はんもよろしく御座候まゝ是も何の出來參り中のよいくつも市藏か評判はきのとくな程悪しく御座候なり二條にて大角力殊の外當りに御座候ひき緋緘雷電をこかし申し候て大騒はきに御座候先頃江州八幡の本屋徳藏と申す人に逢ひ申し候處此人奇妙なる藥を賣り擴め申候京都にても多くためし申し候處たましく色の黒き者は雪の如くに白くなり申し候事腹薬致し申候女ごものはなしにて承り申候まことに肝のつぶれる程奇妙なり。

○弘法大師真跡うた

世をうしの花見車にのりの道ひかれてこゝに廻り來にけり

右存在遠江國巖室山之牛鼻巖窟寛政三載辛亥春三月中旬奉寫

○市川白猿戲述

我稚き時十四歳 祖父柏菴翁の膝のもとにとし月遊へるに、或年の菊月重陽の日、祖父の我に向ひ給ひて、いふてみや菊栗きくくりみきくくり

と重陽の絶句をかけられしまゝ予即席に申候合せて菊栗六きくくり

と返しに吟しければ、祖父微笑して、汝滑稽の才に富り、末頼もしと祝ひ給ふ、斯くかいつくれば、我が身の自讃かましけれど、さにあらず、是れ戯れなり下略

二年河原崎芝居大繁昌せしに、三月休みにて年毎に節句前二三日休なり、其休のをりから、小佐川巨提なるもの、坂東八十助と中島和田右衛門と兩人を誘ひて、真間の紅葉見に行よし、小舟にのりるを見つて讀みける

和田右衛門八十助なども漕出んと人にはつけよまゝのつり舟
身罷りたる伴、團十郎か書たりし撫子の花の扇面に
世の中のたやの心はおしなべてからも大和も河原
なでしこ

ことし十四歳なる孫、團十郎か初役の五郎時宗の一
枚繪に讚す

團十郎もくさをすへた灸のあとのかゆい所へと
け孫の手

古今の序のこはいろ

芝居とは、人の心を種として、萬のなくさみとはな
れりけり、市江は路考か上にたゞん事かたぐ、路考
は市江か下にたゞん事かたぐなんありける、此頃名
を得し人々には、市川の新車は歌のさまは得たれど
も、實少なし、たとへば繪にかける女をみて、いた
づらに心を動かすか如し、坂東薪水は、心餘りて言
は足らず、たとへばはしほめる花の、いろなくて匂ひ
残れるが如し、小佐川の巨提は、はしめたりたし
かならず、たとへば秋の月を見るに、曉の雲にあへ

るか如し、坂東秀佳は、言はたくみにして、いはど
商人のよき衣きたらんか如し、岩井の杜若は、そと
たり姫のなかれにて、強からぬやうにて哀れ深し、
いはどよきをんなの惱める風情有るが如し、松本錦
升は、そのさまいやし、いはど薪を負へる山人の、
花の影に休めるか如し

斯くして評者も一首を残す

白猿

鼻に鳴鶴井にすむ蛙いつれか聲を讀さらんやと
子の春正月、澤村源之助の、羽織のうらにも書き
給へど願ふまゝに、とりあへず

あら玉のどしの御子忠評判もよしの花の江戸の
祐成

甥の杜若かたより、蕎麥切寒見舞に送りこしけるに、
禮状遣はせしその文の末に戲書

御親父に似たりやにたり杜若まぢもやしきも引を
わつらふ

門弟男女藏か、助六の評判よろしきを悦びて送りけ
る

此春もしつかりしめた鉢巻は江戸紫の江戸ツ子の
はど

或時、御ひみきのかたのもとめに應じて、しばらく
のせりふといふものを、かひてまゐらせける、
當時なんにもくつたくなし、北狄せけんには交はらず、
天地就とん蕎麥切に、ある平糖は不自由なところ、
牛の御前の股腹耳目とよはれたる、かつしか七左衛
門せうふしつなし、當年つもつて七月中旬、なんと
みな様、また暑いじや御座りませぬか、なみく／＼な
らぬ別荘の中に、恥ぢざるあはらやはかの顔回か陋
巷に、肱を枕の高野、月を三升の定紋は、孫にゆつ
らは神馬漢海、老は先祖の預りもの、代々ごころは
ねぬきにて、八百八丁御そんじの、花の御江戸の役
介親父と、ほと敬て申候、

右市川白猿戲述

文化二丑年文月十四日記

やはな事ながら千秋万歳

○元祿古武鑑

浅野内匠頭殿長矩

御母内藤飛騨守殿御娘

御内室淺野式部殿御妹

播州赤穂

上屋敷殿堀州中舟山下赤坂

家老 千二百石 大石内藏助
千二百石 大石 頼母

留守居 奥野 將監

堀部彌兵衛

聞番 富森孫兵衛

たこやんし

川合又左衛門

右武鑑延享四年新板改正四冊

江府書肆 日本橋通二丁目

若菜書小兵衛板行

○淺草海苔狂歌

淺草海苔に歌をよて得させたる返り事に
むさしなる淺草海苔は名のみにてお心さしの深川
のもの

右 信海

右古今夷曲集に見ゆ、此頃もはや淺草よりは出す、

深川より出しと見たたり、今は大森邊より出るとは、弓矢八幡信海も知らざるべし

○土手

土手と云ふ事は、皇居の御構ならでは、土手とは云はざるなり、元祿の頃、堀川本國寺にちいさいさまを築れんと、書上に土手とありしを、足溜りと書き直されけり、また諸國には、土手とも人溜りとも、口ともいふなり。

○小田原町並新場魚戸

江戸小田原町の魚戸、三百四十軒ばかりあり、これは諸國より來れる魚、此處に來れるなり、新場の魚戸は十六軒ありて、いづれも大家なり、これは上方の店にして、番頭などなり、相摸の國の濱の魚此處に來るといふ、小田原町の魚戸、柳屋傳六の咄しなり、單按るに、小田原町は、國初に小田原より來りしものなるべし、新場は江戸の繁榮を聞いて、後に相摸の濱邊のものに敷銀して、江戸にみせを出せしなるべし、

小田原町は所謂江戸ッ子にして、江戸役者をほめ、市川團十郎を最負するも、此ゆゑなるべし、新場は

上方ものゆゑ、中村歌右衛門を最負するも斷なり、小田原町もまた歌右衛門最負なりしか、今年庚午のかほ見せに、芝翫^{歌右衛門}練市令の吏に囑託して座かしらとなり、小田原町のものに沙汰せざるを怒り、こゝし中村座役者のうち、新にいりし尾上松助^{三澤村田之助}また居なりにも澤村源之助^{三人}をよひ其方とも三人江戸ものとして、いかなれば上方ものゝ、座頭の支配をうくるまで、來年一月は狂言を休むべし、三人とも町内にて養ひとらせむといひしかば、三人とも其勢ひにおそれ承伏せしを、座元帳元等おほきにおごろき、早速わび言して、やう／＼に事すみけり、然るに小田原町のものとも申様は、當年出せしやくら下番付の名の所、澤村源之助、尾上松助計スケといふ字をほりいれて、小田原町わくはり直すべしと云故、せんかたなくその通りにせしとなり、スケといふ字ほりたるやくら下番附二三枚、柳屋傳六贈れり、予嘆して曰、世は澆季に及ふといふといへども、日月は未だ地に落ちず、日本橋邊江戸ッ子の氣象みつへし、予戲に嘲芝翫といふ狂詩をつくりて、大唐紙一枚に書て柳や主人に

贈れり、

一旦廬名竊孟侵、開場不見一繩頭、燕都俠客豪如
此、偷父西來落膽不

今年は右の事にて、毎年十月晦日には、芝居に積物といふ事あれども、積物なし、積物のかはりて、外の役者ともに金五兩三兩つゝ小田原町より贈りしか、歌右衛門計りにはわくらず、尤も座頭にはかならず幕を染めてわくる事なるを、是もなし。

○内山先生年回の歌

内山先生^{字天文}天明八年申の十一月九日にうせ給ふ、こゝし二十三年忌なり、その子明時小太郎牛込七軒寺町、瑞祥山風林寺にて追善の和歌會あり、題は冬懷舊なり

内山先生廿三回忌をむらふ言葉

大 田 覃

このごしいかなる年にやありけん、あふけは高き天明ごきこゆる八とせ長月九日に父を失しなひ、同じ霜月に先師身罷り玉ひぬ、かのみつに生ふてふ民草の、二つをたにうしなひし、霜の夜の苦つちくれの秋も思ひ出らるよよ、こゝし廿あまり三のごしの忌に當りて、其子明時ぬし、そのわきつきごころ風林

さう坐にもろ人を集へて、冬懷舊といふ歌をよましむ、思へば去にし安永八のごし長月の頃、先師の師靜山先生三十三回の忌にあたらせ給ふ法筵に傳りしに、先師の文に、やつかれごしいそちに七とせくはへたなれば、かしく飯のあはれいそとせのみわさつかうまつり奉らむ事は、玉の緒のたふへくもあらしごかゝせ給ひしか、やつかれもまたごし六十に二とせくはへたなれば、これより廿餘り七の忌は知らず、三十三回の忌にもあひなは、古しへより稀れなりと云へる不躰矩と云へるよはひをも越ねぬへければ、玉の緒の長きためしもおほつかなく、文集の唐詩に、十人の酬和九人なしと云へる如く、むかし先師の側に侍りし人々、皆よもつ國の客人となりて、残りごままれるは稀れなり、けふもごより此事をたすけんと思ひしが、たほやけ事の暇なくて、未のあゆみをそく、短き日影けの暮れぬうちにみてらに辿りつきて、いさゝか老の繰り言備ふるになむありける

冬懷舊

えだの雪まなひの窓になくせしもはたごせあま
りみ冬立つ空

從五位下朝比奈河内守藤原昌始
むかしみしかけもうつらすこほりゐて冴ゆる寺
井の月のあはれさ

明 時
したふこの心はなをもあつふすまはとせあま
り三とせ重ねて

當座題

桐

草

朝日さすぞのへの桐のかけたかみみぬもろこし
の鳥もなくへく

この日來會するもの、わつかに二十餘人にして、昔
見し人は朝比奈河州 昌始 中山忠助のみなりき、岡
田清助はさる事ありしか來らす

昌始の歌によめる寺井の事を、佐々木萬彦 飛騨
に問ふに、萬葉集ものゝふの八十のいもらかくみ
まかふ寺井の上のかたこのはな 六帖にかたかし
とあるはあし、かたかこはかたくりなりと加茂眞
淵かいへるよし。

○元和元年御制法

一大ひたひの

條々

一大なでつけ、大すりさけの事

一足敷下置候者の事

一大刀差し候者の事

一長脇差さし候者の事

一朱鞘さし候者の事

一大鋤大角袴差候者の事

右七ヶ條相背候於有之ては其身は籠舎主人は爲過
料銀子二枚ツ、可出之但下置候者の儀主人爲過意
銀子三枚可出之事

一 お腰掛高聲高雜談仕候者の事

一 同あたま包候者の事

一 腰掛にふせり又は鏡を見井足を投げ出し居候者の
事

一 道路に立候て往還を妨げ井に大手橋に立欄干によ
りかゝり居候事

一 腰掛けにて誦舞小うたうたひ候者の事

一 高腿たち取り候者の事

右六ヶ條相背候者於有之は其身に申斷無承引事は主
人の名字を尋もし不申付者則とらへ可籠舎主人は爲
過意銀子五枚充可出之事

一 たばこ吸ひ候者見合に可成敗事

一 小者草履取刺布類着候者於有之者其身の衣裳を刺

ぎ取るべし主人は爲過料銀子二枚可出之事

一 御目付面々御法度の旨申付候儀致違背其上口雜言

自然刀に手をかけ候者則斬罪たるべし同主人は過

料として銀子五枚可出之事

右諸箇條の内科の輕重雖被仰出罪科於及數度と其主
人可爲曲事事

右の條々堅被仰出候口但御本丸之者は可爲各別者也

右元和元年五月十五日

於西丸被仰出

此御制法と云寫本青山久保町田口氏にて一見

○堺町茶屋和泉屋

堺町の茶や和泉やは、草わけの茶やにして、ねき町
に芝居ありし時よりの茶や也、もとは兩替屋なりし
か茶屋となれりと、市川團作の話し也。

○祝壽不祝松と柏云々の詩

予か六十の壽の時、屋代弘賢のもとより、祝壽不松
與柏云々、夜々清光長皎潔までの句を双鉤せし祝贈
りて、何れの人の句、いつれの人の書なりやと問、
予其頃よみ置きたりし歌

鶴もいや龜もいや松竹もたゞ人にして死ぬそめて

たき

と云ふ歌と同様なり

以月祝壽

暫年過庭開解春雨壽太宰詞云祝壽不祝松與栢松栢老
來無顔色祝壽不祝龜與鶴龜鶴老來變爲雀祝壽只祝天
邊月夜々清光長皎潔每至五更天欲明引領衆星朝北關
東陪六曹之首亦善頌矣

右清人吳所敬が、公餘勝覽國色天香に出たり、庚
午十二月二日燈下に抄出す、戊辰より三年を経て
此句を見ることを得たり、讀書の一得今にはじま
らす。

○三宅松明詩

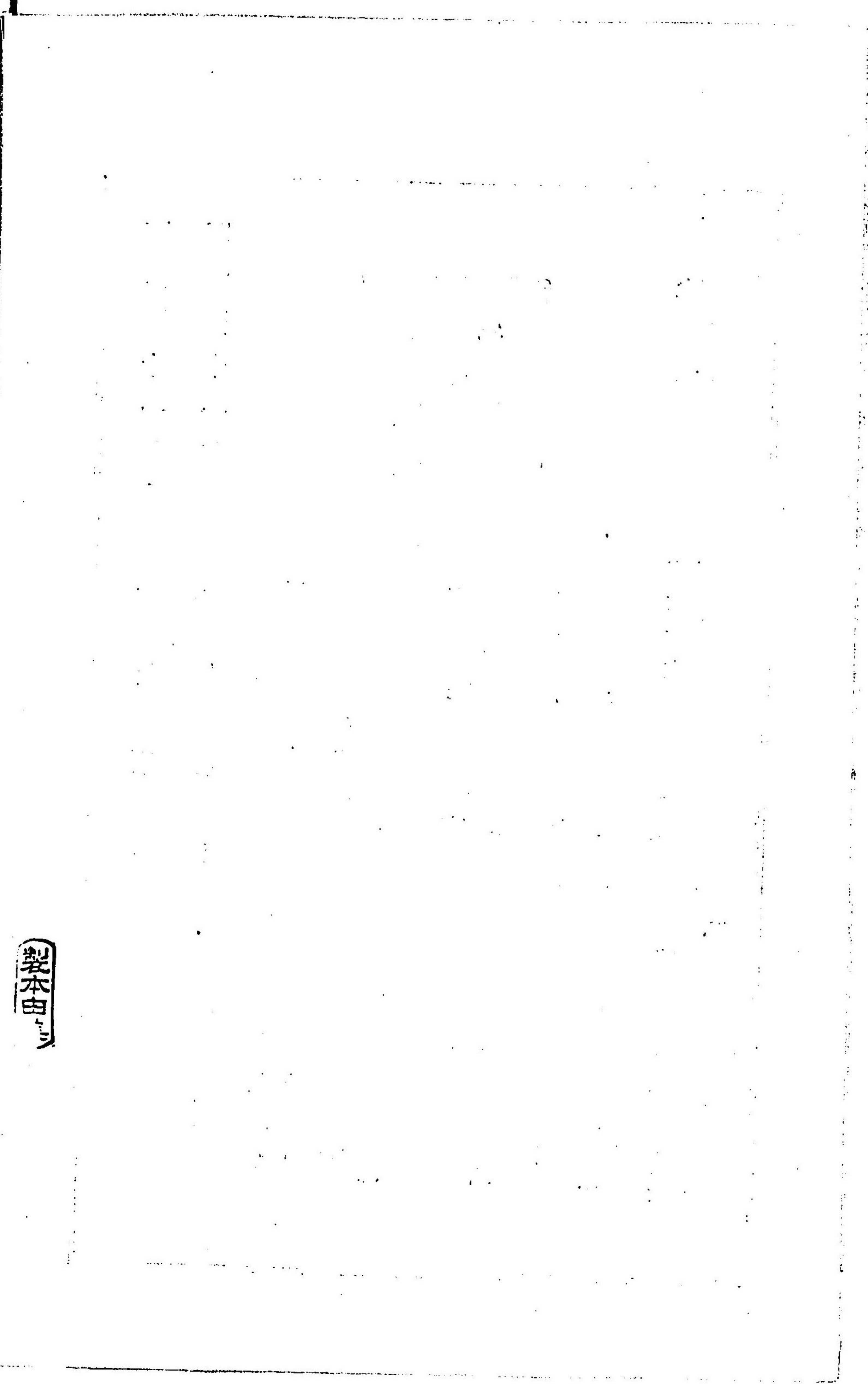
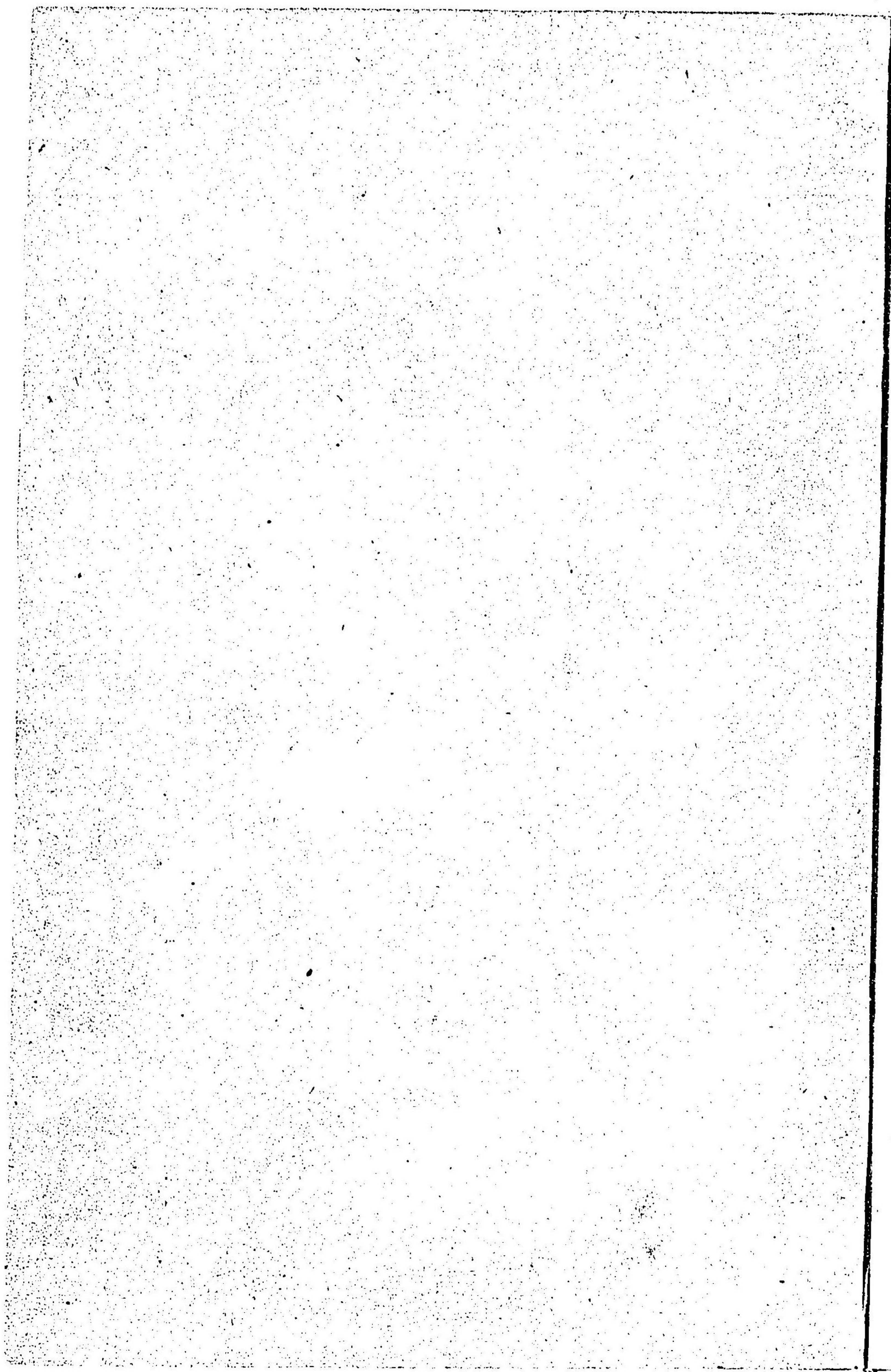
端午の日作端午の歌

端五家々探艾回帖子狂斐我未裁我未裁矣嘗菖酒樂
亭。蟾蜍左來學

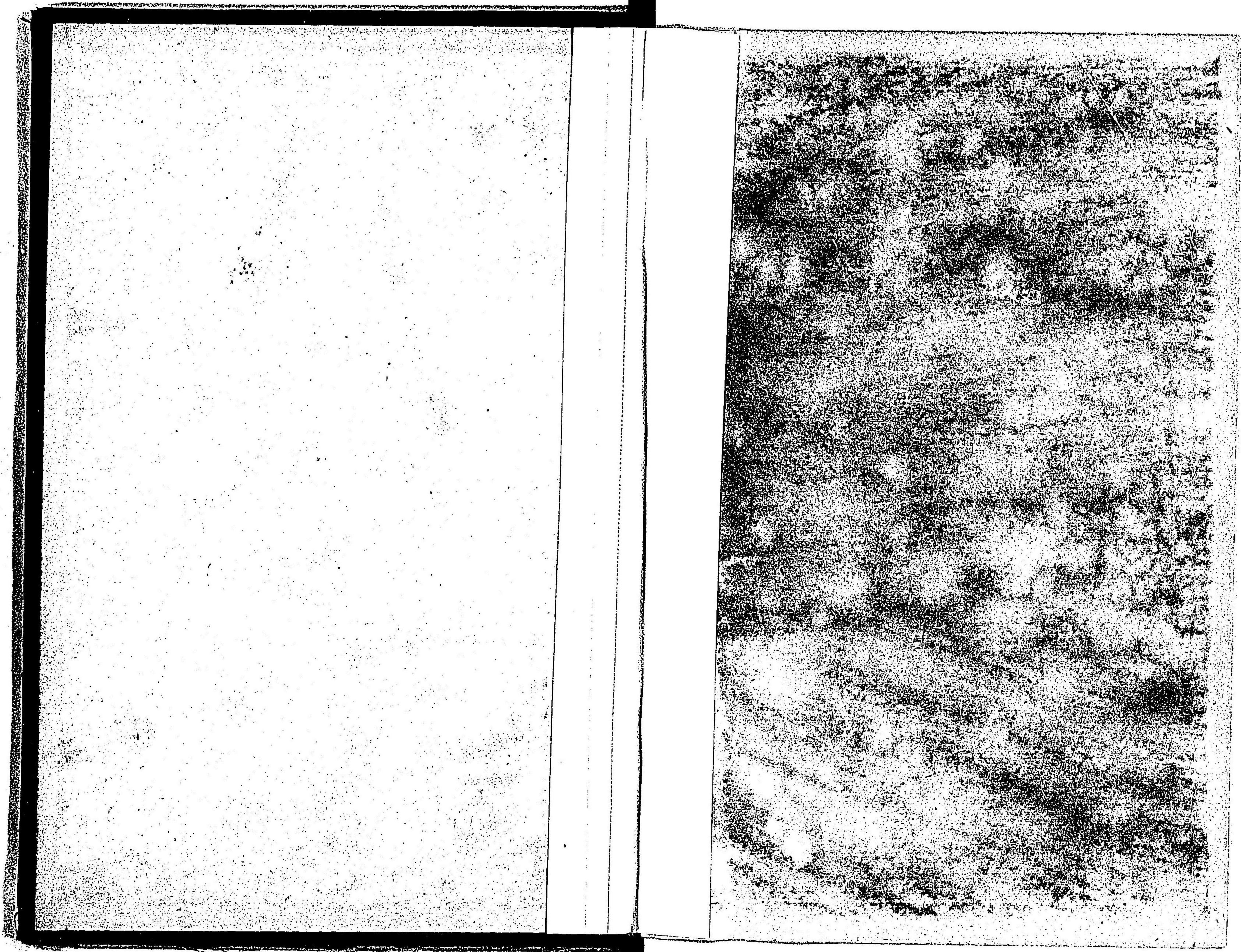
松 明

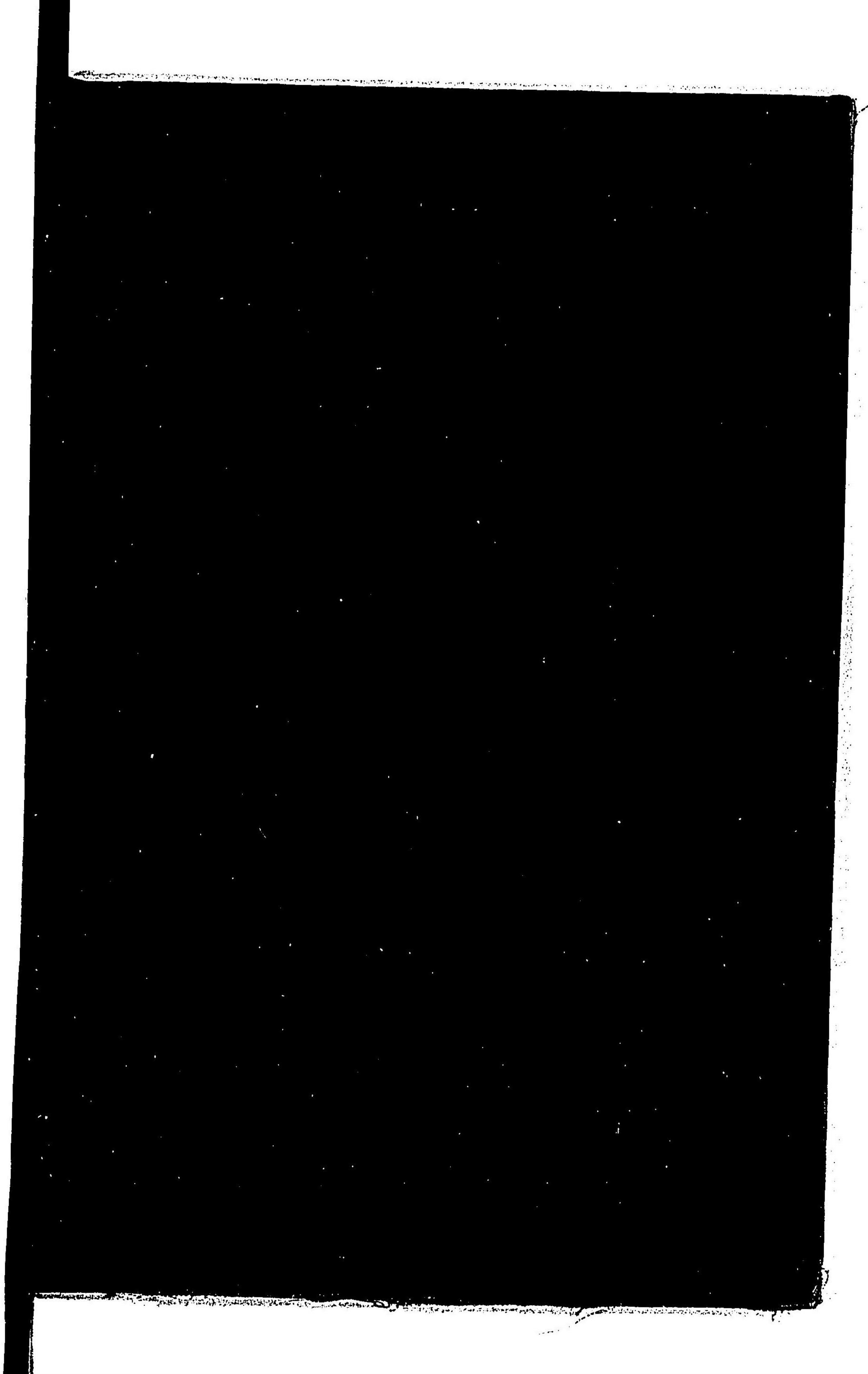
右は三宅松明の作にて、大林新次郎藏也、松明は茶
道香道を以て世に名あり、入唐せし人と云、寛永の
頃の人なり。

一話一言補遺卷九終



製本由





918.5

0846A

